



令和5年靖国神社の絵馬



第144号

公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会  
編集人 金子敬志  
発行人 石井光政  
印刷所 島根印刷株式会社

目次

巻頭言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 理事長 岩崎 茂 2  
各地慰霊祭等報告  
第59回楠公回天祭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 評議員 高松真希 4  
評議員 宮本雅史

陸軍鉾田飛行学校慰霊祭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 会 員 池田康博 10  
編 集 長 金子敬志

茨城県特攻戦没者慰霊祭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 評議員 及川昌彦 11  
評議員 石井光政

長野県特攻勇士之像慰霊祭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 専務理事 原 知崇 15  
評議員 高松真希

串良基地出撃戦没者追悼式・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 評議員 高松真希 16  
評議員 鮎田英一

大阪護国神社特攻勇士慰霊祭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 評議員 高松真希 17  
評議員 福江広明

神風特攻敷島隊五軍神追悼式典・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 評議員 高松真希 18  
評議員 高松真希

長崎縣護国神社「特攻隊慰霊祭」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 評議員 高松真希 22  
評議員 高松真希

フィリピン特攻戦没者慰霊祭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 評議員 高松真希 22  
評議員 高松真希

第四十九回若潮慰霊祭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 評議員 高松真希 22  
評議員 高松真希

會員等投稿  
特別寄稿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 台北駐福岡弁事処 陳 銘俊 24  
評議員 多田野弘

多田野語録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 会 員 多田野弘 28  
元海上自衛官 岩戸博明

イラスト「孤高の戦士」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 会 員 中川法宏 33  
評議員 池田康博

特攻隊員へのインタビュ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 会 員 原 知崇 35  
評議員 池田康博

「若人の夢と祈り」展・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 会 員 池田康博 37  
評議員 池田康博

連載 山ある記21・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 会 員 池田康博 38  
評議員 池田康博

顕彰譜(9)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 会 員 池田康博 39  
評議員 池田康博

芸欄 歌俳柳の広場・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 会 員 池田康博 44  
評議員 池田康博

短歌・俳句・川柳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 会 員 池田康博 44  
評議員 池田康博

新刊書籍紹介「米軍から見た沖縄特攻作戦」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45  
事務局からの報告等  
令和4年度第3回理事会及び第1回臨時評議員会の実施報告・・・・・・・・・・・・・ 46  
第44回特攻隊全戦没者慰霊祭の斎行について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46  
会報記事の訂正・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46  
寄付者等の報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46

挿絵提供 空自OB 宇山氏

「巻頭言」  
公益財団法人

特攻隊戦没者慰霊顕彰会  
理事長 岩崎 茂



令和五年も国内的には穏やかに明け、既にひと月が経ちました。会員の皆様は行動様式も通常どおりになっていることと拝察申し上げます。

私は、「国内的には穏やかに明け」と記述しましたが、わが国の国内では比較的平穏無事な新年を迎えることが出来ましたが、わが国の周辺を含め世界を見渡せば、皆様が感じておられるとおり、残念ながら決して油断できる情勢ではありません。

ロシアによるウクライナ侵攻は昨年の

2月24日に開始され、もうじき1年になるうとしていますが、一向に収まる兆しがありません。昨年の秋以降は、ロシアによる戦術核の使用も懸念される事態になっていきます。

中国に関しては、引き続き尖閣諸島周辺での海警局所属の公船が数隻ほぼ常続的に遊弋し、交代時に尖閣諸島の領海に侵入する事案が継続されています。新年になり元旦から二日間連続で、これまでに確認されていない新型の無人機が東シナ海から西太平洋で活動し、その直後には、石垣島と西表島の間の狭い水域を中国海軍艦艇が通過する等、特にわが国の南西地域での中国航空機や艦艇の活動が活発となってきました。台湾周辺では、最近の2年間で台湾の防空識別圏に200機を越える中国機が侵入し、特に昨年の米国防務長官の訪台の直後から、その頻度が増加傾向にあるとの報道がなされています。そして、昨年末には、南シナ海で、中国の戦闘機が米軍機に対して、かなり近い距離まで接近する事例が生起する等、極めて危険な状況となっています。

北朝鮮は、昨年は過去最大となる弾道弾発射を行いました。大晦日と本年の元旦と二日連続して弾道弾を日本海に向

け発射したことが確認されています。これらの弾道弾は、我が国の排他的経済水域には到達していないものの、許されることではありません。これまでの北朝鮮の弾道弾発射による航空機や艦船の被害は報告されていないものの、これは単なる偶然であり、極めて危険な行為であることに変わりはない。この様に、わが国周辺では決して油断できない事態が進行しつつあります。この状況では、冒頭の「穏やかに〜」とはとても言えない状況です。

さて、この様な新年となっておりますが、本年は卯年です。十干・十二支では、「癸卯（きぼう／みずのと・う）」の年です。「癸」とは、もともとは大地を潤す水の事で、十干の最後でもあり、これまでの努力の集大成の年でもあり、次の新たな時代の準備の年でもあります。そして、十二支の「卯」とは、ウサギのことであり、安全・温和の意味があり、ウサギの様に飛び跳ねる（飛躍）年でもあります。この様なことから、「癸卯」とは、これまでの努力が実り、新しい芽（成果）が出てきて育つ時であり、発展・飛躍の年と言われております。

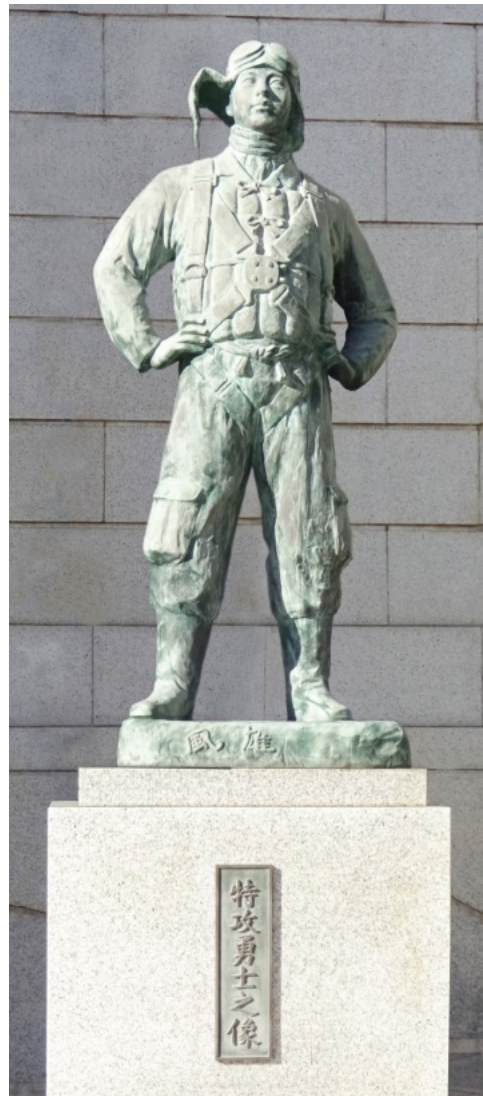
世界でも、わが国でも、この三年間は、コロナ禍でやや沈んだ空気が漂っており

(3) 第144号

ましたが、最近は少し明るい兆しが見えだしてきています。この三年間は、わが特攻隊戦没者慰霊顕彰会も各種行事を催すにあたり規模を縮小して実施せざるを得ない状況でした。また、全国各地での特攻隊関連の慰霊行事も中止されたり、規模縮小を余儀なくされておりましたが、漸く出口が見えてきた感じがします。当面は、新規感染者数の推移等を注視しつつ、コロナ対策に万全を尽くし、各種行事等を行うことになると思います。

来月から全国各地での特攻隊員を慰霊する行事が始まります。当会が主催する「特攻隊全戦没者慰霊祭」も3月25日(土)に靖国神社で執り行う計画です。現時点では、参加者を限定することなく、コロナ以前の参加態様で行いたいと考えております。是非、会員の方々には、確りとしたコロナ感染防止対策をとりつつ、靖国神社での慰霊祭や全国各地での慰霊行事に参加して頂きたいとお願ひ申し上げます。

最後になりますが、在天の御英霊に対し、我が国の繁栄と安寧を与えて頂いたことに謹んで感謝申し上げますとともに、我々の行く末を見守ってくださいるようお願い申し上げます。





第59回楠公回天祭

評議員 高松真希  
評議員 宮本雅史

令和4年9月4日(日) 10時より岐阜県下呂市の飛騨信貴山山王坊境内・回天楠公社前に於いて「第59回楠公回天祭」が執り行われ、石井専務理事兼事務局長、宮本評議員と共に参列させて頂いた。

この祭事は、人間魚雷『回天』を創案し、回天の航走訓練中に殉職された下呂市出身の黒木博司少佐と、回天での特攻作戦で散華された回天搭乗員106名、回天整備員36名他を併せた計145名の



回天碑

御霊を慰霊、顕彰するものである。コロナ禍であり、全国から参列者が集まるのは3年ぶりとなり、細部にまで感染防止に配慮がされた中、40名が参集した。

前日の下呂は雷を伴う豪雨に包まれて



いたが、当日は打って変わって雲ひとつない快晴であった。夏の日差しと共に、周囲を囲む山々や近隣から、蟬の音が呼応し合うかのように、遠くに近くに重なっては途切れることなく楠公回天祭に届いていた。

軍艦旗に対する敬礼、神職入場の後に神事が挙行された。

修祓、祭詞奏上、玉串奉奠等が厳粛に斎行され、最後に献詠が奉納が行われた。

この献詠の和歌は岐阜を中心に日本全国から集まったもので、全13首が朗読された。黒木少佐や特攻隊員に思いを馳せる歌や、現在の世界情勢を絡め戦争を詠みこんだ歌など、心に響く13首であった。

楠公回天祭は、定刻通り10時30分に、肅々とした中で終了を迎えた。

その後、回天楠公社から徒歩5分ほど坂を下った下呂交流会館にて、11時からアニメ「僕たちの回天」の上映、講話、直会が行われた。

今年黒木少佐が誕生し、ちょうど100年の節目の年である。

その節目の年に合わせて、海軍少佐黒木博司生誕百年記念事業委員会がこの回天のアニメを製作したようだ。脚本・アニメ化は、下呂で生まれ下呂に在住の井上勝仁氏と奥様が手掛けられた。この日が初公開となり、約1時間のアニメを鑑

賞させて頂いた。

アニメ「僕たちの回天」は、現在の若い2人の教師が黒木少佐の生き方に触れて、心を寄せていく物語である。DVDは今秋に完成、発売予定とのことである。

その後、回天楠公社奉賛会幹事の横山氏による40分ほどの講話があり、黒木少佐がまだ機関学校3年生だった頃に東京帝国大学で国史学を教えていた平泉澄教授に出会い、師弟関係を結び深く傾倒していった経緯や歴史の流れを伺う、学びの多い場であった。多少の時間を超過し、無事に全ての行事が終了した。

なお、今年の第60回楠公回天祭は9月10日、第2日曜日に挙行される。

(高松真希 記)

### 「特攻隊員に引き継がれた楠公精神」

評議員 宮本雅史

岐阜県下呂市の飛騨信貴山山王坊境内の回天楠公社で開かれた「楠公回天祭」。祭神は楠木正成を主祭神に、大東亜戦争末期、人間魚雷「回天」を考案した黒木博司大尉(当時二十二歳、没後少佐)と回天で出撃、散華した搭乗員。回天楠公社は、昭和三十九年一月、黒木少佐と交流の深かった皇国史観の主唱者である平泉澄氏が、自ら建設地を交渉するなどして創建し、黒木少佐と回天搭乗員を合祀。昭和三十九年から毎年9月、開かれてい

る。

人間魚雷「回天」は、旧日本海軍が九十三式酸素魚雷の前半分を直径一メートルの円筒で包み、頭部に魚雷五本分に相当する一・五五トンの炸薬を装填、人が乗り込んで操縦し、敵艦に体当たりする特攻兵器だ。針路、速度、深度をセットすれば自動で直進するが、中央の操縦席に座った搭乗員は、特眼鏡(潜望鏡)による短時間の観測で、敵艦の針路や速度、距離に応じた射角を決定しなければならぬ。さらに、高圧酸素の消費に並行して変化する浮力や釣合いを常に調整しなければならず、敵艦に命中するためには相当の熟練を必要とした。

元回天搭乗員は「搭乗して驚いた。油臭くて仕方がなかった。漏えい防止の油の臭いだった。操縦席は狭く、右足は曲げたままで、左足はやつと伸ばせる程度だった。艇内は豆ランプの小さな明かりだけで、ハッチを閉めた瞬間、孤独感と恐怖を感じた。電動縦舵機の起動スイッチを入れ発進準備が整うまで十九もの動作があり、この動作を正確に順序通りに行わないと、発進しないだけでなく、酸素爆発を起こす。訓練そのものが事故と隣り合わせだった」と振り返る。

回天特攻作戦は、昭和十九年十月から二十年八月まで続けられ、八十九人の搭

乗員が戦死し、十五人が訓練中に殉職、二人が終戦時に自決した。また、回天を搭載した潜水艦とともに三十五人の整備員と八百十一人の潜水艦乗組員が海に散っている。

「眼のある魚雷」と言われたこの特攻兵器は、なぜ考案されたのか?狭い魚雷に身を沈め、操縦しながら敵艦隊に突撃していった搭乗員の心中はいかなるものだったのか?そして、なぜ、楠公祭なのか。

六百八十六年前の延元元年(二三三六)五月二十五日、足利尊氏との湊川の戦いで敗北を覚悟した楠木正成は、弟、正季と刺し違えて果てる。太平記によると、自刃前、兄弟が誓ったとされる「七生滅賊」(七度生まれ変わっても朝敵を滅ぼす)は、後に「七生報国」(七度生まれ変わっても国を護る)と言われ、滅びると分かっても信念のもと最後まで天皇に忠義を尽すという正成の生き方と楠木精神は、もののふ(武士)の鑑として時代を超えて尊敬、敬慕され、国民の心に浸透していった。幕末時には吉田松陰や眞木和泉守ら勤王の志士たちの、大東亜戦争時には特攻隊員らの心の支えになった。

人間魚雷「回天」を考案した黒木少佐も楠公精神に影響を受けた一人だ。

少佐は昭和十九年九月六日、樋口孝大

尉（同二十二歳、同少佐に）と山口県・大津島で悪天候のなか訓練中、艇が海底に突き刺さり殉職。艇内には、事故発生時の状況や事故直後からの応急処置など二人が息を引き取るまでの状況と改良策を書き連ねた、二千字にも及ぶ『191916 回天第1号海底突入事故報告』が残されていた。少佐らの回天への強い執着と覚悟の程が伝わってくる。

だが、闇の中を暴走するように敵艦隊に攻撃をしかける特攻兵器を考案した黒木少佐に対し、世間の目は必ずしも温かくはなかった。

戦後、「あんな殺人兵器を考えなければ、うちの息子は：」という冷たい視線が、少佐本人だけでなく、残された両親や兄妹にも向けられたと聞く。

少佐はなぜ、必死必殺の兵器を考案したのか。何が少佐をそこまで追いつめたのか。答えは、少佐が残した手紙や日記にあった。

昭和十六年に入り、大東亜戦争の勃発を予感した少佐は、妹の丹羽教子さん（故人）に「三年以内に日米戦の起ることも確かだ。海軍の非常時だ：今度は日露戦争の時以上の多くの真の決死隊が要るだろう：広瀬中佐が第二回閉塞隊出動に際し遺書せられた七生報国笑在船上と

いう気持ちがあるまま兄さんの気持ちだ」と手紙を書いている。

昭和十七年八月、特殊潜航艇の搭乗員の道を選ぶ。日本はミッドウェー海戦で敗退し、連合軍の一転攻勢が本格的に始まるうとするなか、祖国の難局に対峙するのなら、常に危地に出撃する潜航艇で戦いたいと考えたからだ。

特殊潜航艇は小型潜水艦で、潜水艦に搭載され敵艦隊に近づき、至近距離から発進する特攻兵器だ。特攻兵器の搭乗員の道を選んだ理由を平泉氏に、「これまでで経験したことのない国難に対処するため、日本人にとって最高の忠臣の鑑とされる楠木正成には及ばないまでも、開戦当初、真珠湾で特殊潜航艇で攻撃、壮烈な最期を遂げた九人の軍人魂を継承、死に甲斐のある働き場所を求めると報告している。

当時の少佐の心情は十八年一月の『尊皇遺言』からも推し量ることができる。

少佐は、色紙四枚に血で、（：皇統厳存して大義あり。臣子尊皇にして能く皇統扶す。故に大楠公は皇統継ぎ給うあるを以て悲願とし、維新の志士は尊皇を絶叫す。復た吾が微衷なり。世に汚隆なきに非ず。乃ち尊皇の土起ちしは殪れ、斃れては継ぎ、子々相承け屍を重ねて終に今

日に至る。未だ曾て悲願消せず、留魂滅せず。即ち尊皇の存する所楠公あり。皇統の存する所何ぞ死あらん」と、楠木精神に心酔し、正成同様、一命を投げ出す決意を綴っている。

海軍はミッドウェー海戦で壊滅的大敗を喫し、その後、ガダルカナルからの撤退、アッツ島の玉砕と、にじり寄る米軍の前に、なす術がなかった。危殆に瀕している日本を救うにはどうすればいいか。劣勢を巻き返すには特殊潜航艇以上の必死必殺の兵器を採用するほかないと、命と引き換えに祖国を救う道を模索する。そして、たどりついたのが、眼のある魚雷「回天」だった。

昭和十八年四月から翌年三月まで、「鉄石之心」の表題で日記を綴っている。全文血文で、日本の惨敗を避け、国体の破壊を阻止するためには、必死必殺の特攻作戦以外はないという考えが確固たるものとなっている。翌十九年六月には、全文血で記した『急務所見』と題する意見を海軍上昇部に提出、特攻兵器の採用を訴えた。

少佐の一連の言動からは、強気一辺倒な姿勢がうかがえる。しかし、少佐の本音はどこにあったのか。

少佐と懇意にしていたある海軍大尉は、

当時、少佐が語った言葉を書き留めている。<現部隊長は国賊なり。信念なく誠意なし。職責に対してしかり>

〔問題は全く人にあり。決死捨身の覚悟なきにあり。その中何とかなる、最後のときはやると樂觀して怠慢なるにあり。国民然り。特に中央の怠慢は国賊というの外なし。戦局今日に至りし所以、全く物にあらざるにあり〕

開戦時の勝利の陶醉気分は消え、敗戦が現実性を帯びてきたにもかかわらず、軍部には脳漿を絞る者も、的確な判断を下す者もいなかったのだろう。少佐は、戦況悪化の原因は、軍指導部の怠慢と戦略の欠如、指導力不足になるとし、軍指導部を国賊とまで言い切っている。

奈落の底は見えていた。少佐の文言からは、それを避け、日本が生き残り、家族を護り、故郷を護り、国体を護るには必死必殺の特攻攻撃のほかないという追いつめられた姿が見えてくる。そこには正に命を賭けた「苦渋の選択」以外なかった。

家族らへの手紙を見る。

「私の最も崇仰してやまないのは大楠公と松陰先生です。萩へ行った時のあの感銘、私もきつと先輩のこれら忠臣志士に

劣らぬだけの忠勤を致して以て御父母の御恩愛に応へ奉る決心であります」(昭和十六年七月八日付け父母への書簡)

「：魂よりの念願と相成り、七生報国魂魄不滅を信ずることを得、第一線に臨まんとし雄たるもの有之候：吾人が松陰先生となりて至誠天下を導くべきを灌漑仕り候。一人の力微力となさず、至誠必ずや国家天下に致す所あらんことを確信仕り候：」(昭和十六年十一月五日の知人宛て書簡)

家族や知人宛ての手紙には「大楠公」や「七生報国」の言葉が溢れる。敗戦から逃れられない戦況の中でいかに国と家族を守るか。特攻兵器の考案までの苦渋の選択に、国を憂え大義に殉じる姿が正成に重なる。

黒木少佐は、漢文で八百字ほどの『慕楠記』を書いている。眞木和泉守の研究家で知られる思想史学者、小川常人氏は、楠公回天祭で、『慕楠記』について語っている。

小川氏は少佐が号を「黒木慕楠」としていることに注目、「楠公を敬慕し、理想とする道を見いだされたからだと思はれる」と指摘。慕楠の意味は「楠公を慕ふ」といふ意味で間違いないが、ありふれた慕ふとは少し意味が違ふ。楠公の人

柄を慕ひ、手本とする。さらに楠公を恋しく思ひ、忘れないで後をついて行くといふ意味を持っている。慕楠と号されたのは非常に意味が深い」と分析している。

『慕楠記』は「嗚呼楠子之誠忠蓋天下一人矣」で始まるが、小川氏は「この一句こそが、少佐が日頃楠公に対する思ひを表したもので『ああ』といふ感嘆の気持ちを率直に発してゐる」という。

「慕楠記」は「皇統之大義万古定於」  
「神勅大義之國体千歳見忠烈無窮之大道俟之於一楠子焉」：と続くが、小川氏は「皇統の大義は、天皇陛下のお血筋の連綿と続いていくといふ大義で、天照大神の示された神勅によつて、天皇の血筋が何代にもわたつて続いていくといふこと。そのような大義に基づく国体は、いつまでも忠烈な人々が現はれるもので、人として行ふ道は無窮に続いていく。これはただ一人の楠公にまつものなのだと思はれている」とし、「これが少佐の楠公に対する基本的な考え方だと思はれる」と結論付けている。

皇室の歴史に詳しい所功氏は「黒木少佐の楠公を慕う思ひは測り知れない。いとおしさを超えて狂おしさすら感じる」という。回天楠公社奉賛会(岐阜県)の元事務局長、橋本秀雄氏は「国家のため

に大義に生きて、大義に殉じる楠公精神が、心の支えになったのだろう」と分析する。

楠木精神をよりどころにした特攻隊員は多い。「七生報国」のことが引用される遺書も目に止るが、表現は違っても楠木精神を精神的支柱に連合国相手に勇猛果敢に命を賭けたことを偲ばせる手紙や遺書も多い。

回天搭乗員の二等飛行兵曹(当時十八歳、没後少尉)は、父親に「もし、この戦争に負けたなら、大和民族は地球上から抹殺されるかもしれない。国家存亡の秋、じつとしておられないのです。日本人であるならば、それは当然です」と憂国の情を示し、学徒動員で海軍に入り、回天搭乗員として散華した少尉(当時二十二歳、没後大尉)は日記にこう綴っている。

「戦局は日に追うて重大化しつつある。我等青年士官の責務は重大である。任務はそれぞれ異なるとはいえ、究極の目的は唯一、祖国の勝利である。俺達は俺達の親を兄弟を姉妹を愛し、友人を愛し、同胞を愛するが故に、彼等を安泰に置かんがためには自己を犠牲にせねばならぬ。祖国敗れば、親も同胞も安らかに生きてゆくことはできぬのだ。我等の屍によつ

て祖国が勝てるなら満足ではないか」当時、戦うことを望まなかった若者がいたのも事実だろう。だが、彼らはなぜ戦い、自分の命を差し出すことができたのか。元特攻隊員やその関係者に話を聞き、多くの遺書や日記に触れていくと、あの時代、多くの若者たちが、「自分の命を捧げなければ、日本国民と国土を守ることができない」という強い危機感を抱いていたことが浮かび上がってくる。そこには自分さえ助かれればいい、自分さえよければいい、という自己中心的考えは微塵も見られない。同時に、見返りを求めたものはいない。

いなる悲願に立てる国の子の母をばいかで神うばうべき」「君がため母おきかりて行く我は尊く悦しくかなしかりけり」「荒波の世に生く子らの楽しみは両親ありて嬉ぶ見る」と、三首の歌を詠み、そつと布団の下に忍ばせていった。この頃、わきさんの病状を案じる手紙を頻繁に出している少佐は、わきさんが回復すると、「お母さん、お母さんが御手紙がかけるようになったかと思つて涙が出ました。今日は珍しく早朝手紙が配られ、その中にお母さんの御手紙を拝んで夢かとおぼかり涙が出てきました」と喜びと安堵の気持ちを伝える手紙を書き、御製の「たらちねの親の心をなぐさめよ国のつとめにいとまある日を」を添えている。

楠木正成から始まった「もののふの系譜」に私利私欲の世界では理解できない、綿々とつながる日本人の心と、引き継がれる楠公精神のDNAを見る。楠公さんを、そして特攻隊員を語ることは、日本人論を語ることである。

また、別の手紙には「きつと治ると信じていたものの何だか夢のように嬉しい。お母さんの字、一字々々が又楽しく私の心を生々と明るく励まして呉れます。再び、明るい明るい心の光明が輝いたような気がします」と喜びで溢れる気持ちを書き、お母さんへ伝えていた。

黒木少佐に話を戻す。少佐の一連の言動からは、強気一辺倒な姿勢がうかがえるが、少佐の生き様からは、護国精神だけでなく、家族への強い思いと絆も見ることがができる。少佐と家族の強い絆を象徴するエピソードは枚挙に暇がない。例えば、海軍機関学校時代、腸閉塞で倒れた母、わきさんを見舞った少佐は「大

国、殉国の道を突き進む過程で、数々の



葛藤を乗り越えなければならなかった。その支えになったのが家族だった。

「自分自身未だ私心怯懦の権化、未だ未だ自分自身に慾がある。苦しい、辛い、華やかでないことがしたくない此の卑怯な心―心！何故人は慾に迷うか。私は今切々と自分自身の到らざりしを痛感し、本実に神、殉皇に捧げた人に掘り入ってみたいですよ」（昭和十五年十二月一日付け父親宛て書簡）

「：自己の天命、これを知らなくて天下国家のことを知ろうとするのは唯いたづらに社会の、理想に欠けたアラばかりをみることに陥り、不平不満の言行が結局国家の運命を阻害することになるように思います：自分の中を流れる天の命、此れを知り此れを伸ばし此れを明らめ此れに依って生き死なんこそ私達の最も大切なことであります」（同月二十五日付け父親宛て書簡）

家族への手紙では迷いや悩みを素直に打ち明けている。堅い信頼関係で結ばれていたからこそ、少佐は自分の思いを家族の前のさらけ出し、家族も少佐の気持ちの真正面から受け止めることができたのだらう。家族愛と言う言葉を越えたつながり、私心をいましめ、やさしさと厳しさが同居した関係だったことが伺える。

なかでも妹の教子さんには特別に伝えたことがあったようだ。

それは次のような手紙にあらわれている。「：皆未だ生れていない明日の世界の子供達に望みをかけているのです：しっかりとしっかり本心に心して勉強をしなくては駄目です。此の勉強というのは英語とか図画などではありません。本当に御国の為を思う真心の勉強です。女子ノ教育ハ妻ノ教育デハナイ。母トシテノ賢母トシテノ教育デアル：」（昭和十六年六月十九日付け教子さん宛て書簡）

少佐は、敗戦の一因に人材不足を嘆いている。教子さんへの手紙からは、少佐が教育の重要性を感じ、妹にその後の日本を託した期待の大きさを感ぜずにはいられない。

前出の橋本氏は「身内を大事にするという思いは、結局は、国民を大事にするこゝとにつながるのです。黒木少佐は、家族を愛し、国を愛して戦った、悲惨な兵器を作ったという見方もあるが、それしか方法がなかったわけですから。そういう人に対する感謝の心を失っていることが今の日本をおかしくしている。立派なことを言っているが、実際は自分の利害しか考えていない人が多い。黒木少佐から学ぶべきことはたくさんある」と話す。

少佐が残した血書や両親、兄妹、恩師宛の手紙などは「海軍少佐黒木博司遺文集」に集約されているが、遺文集は少佐の生き様を通して、国と故郷を護るためには何をすればいいのか、そして家族との強い絆など、戦後、日本人が忘れ去ったものを思い出させてくれる。



黒木少佐生誕の下呂の街並み

陸軍銚田飛行学校慰霊祭

会員 池田康博

太平洋を眼前に望む茨城県銚田市は、大東亜戦争時には、旧陸軍初の特別攻撃隊、岩本益臣大尉率いる「万朶隊」が編成された地である。不死身の特攻兵として小説にもなった佐々木友次伍長もまた万朶隊であった。

銚田陸軍飛行学校からは、万朶隊のほか鉄心隊、勤皇隊など24の特攻隊が編成され67名が散華した。また、昼夜を分かたぬ激しい訓練により、多くの将兵や軍属も殉職したという。

これらの特攻隊員や殉職者に対する48回目の慰霊祭が、10月2日(日) 飛行学校門衛所跡に建立されている陸軍飛行学校頭彰碑前で執り行われた。

当頭彰会からは及川評議員と私が参列した。

当日は、主催者である「陸軍飛行学校を伝える会」の東野一也会長ほか会員の皆様により、慰霊碑に、しめ縄が張られた祭壇が設けられた後、9時10分に開式、東野会長による祝詞奏上、玉串奉奠に続き、根寄市議会副議長による式辞、松島悟氏の講話があり、その後、参会者全員が献花して、9時40分に閉式となった。



この日は、参会者が銚田市長ほか35名と多く、狭い慰霊碑内に入り切れない状態であった。NHKや茨城新聞、フリーランスのライターなど報道関係者も来場していた。

慰霊祭終了後は、近くの公民館に場所を移して懇親会が催された。予科練出身の古老や、遺族、筑波大教授、高校の教師、高校生、ライター等々、ほぼ30名が参加し、全員が戦争や特攻、平和などに

ついて思うところを発表し、貴重な時間を過ごして12時過ぎに散会となった。  
また、丁度この時期に、市の生涯学習館において「銚田陸軍飛行学校と銚田地方の人々」という企画展が開催されているということで、市民団体などが集めた特攻隊員の残した写真や手紙など、貴重な資料を見学に行き、市民学芸員や東野会長の説明を聞きながら当時の状況について理解を深めた。



企画展の展示物



茨城県特攻戦没者慰霊祭に参列して

編集長 金子 敬志

令和4年10月9日(日)茨城県護國神社において「令和4年度茨城県特攻戦没者慰霊祭」が斎行されました。

この慰霊祭に岩崎理事長と共に参列させて頂きましたので概要と所見を報告します。

1 慰霊祭の概要

慰霊祭は参道脇に建立された「茨城県特攻勇士の像」の前で行われました。

当日の参列者は59名で、現職の国会議員ご本人は、衆議院議員3名、参議院議員4名の参列がありました。現役自衛官としては、陸上自衛隊霞ヶ浦駐屯地司令柿野陸将、航空自衛隊百里基地司令石村将補が参列されました。

慰霊祭は午前11時から12時までの予定で開始され、式次第は次のとおりです。

- 一、開式の辞
- 一、修 拔
- 一、降神の儀
- 一、敵 餌
- 一、祝詞奏上
- 一、玉串拝礼
- 一、黙 祷
- 一、撤 餌

- 一、昇神の儀
- 一、宮司挨拶
- 一、閉式の辞(祭電披露)

祭事後、主催団体の茨城県特攻勇士之像奉賛会幡谷定俊会長からのご挨拶があり、続いて岩崎理事長が挨拶しました。その後、参列された国会議員の方々のご挨拶が行なわれ、12時10分すべての予定を終了、新型コロナ禍のため直会は行われず解散となりました。

2 所見

本慰霊祭は概要にも書きましたように多数の国会議員ご本人の参列がありました。7名もの参列は初めての経験で、地元との結びつきが強いと感じました。

茨城県の特攻像は、全国の護國神社等への特攻像奉納事業の第18体目として奉納されました。奉納除幕式の様



特攻像前の祭事

除幕式の様



岩崎理事長の挨拶

子については会報124号(H31年2月号)に紹介されています。茨城県護國神社は梅で有名な水戸偕楽園の近くにあります。偕楽園のとの間にはJRの常磐線が通っています。橋が掛かっており、5分程度で到着出来ますので、お近くにお出での際は少し足を延ばして、是非ご参拝下さい。奉納式が平成30年10月14日(日)に行なわれた事にちなみ、慰霊祭は毎年10月の第二日曜日に斎行されます。令和5年は10月8日(日)の予定ですが、ご参列希望の方は当頭彰会にご確認下さい。

長野縣護國神社特攻勇士之像慰靈祭に参列して

評議員 及川 昌彦

令和四年十月十三日(木) 十四時より  
長野縣護國神社にて特攻勇士之像慰靈祭  
が執り行われました。

長野縣護國神社は昭和14年に内務大臣  
指定護國神社となり別名は信濃国の枕詞  
に由来する美須々之宮ともいいます。

当日は奥谷一文宮司を中心に長野県隊  
友会の牧 幸生会長、川上 明彦事務局  
長、崇敬会や遺族会の会長が以下12名の  
参列で特攻勇士之像前にて神式にて開催  
しました。

齋主以下祭員並びに参列者が集合した  
後に

- ・ 修祓
- ・ 降神ノ儀
- ・ 神饌を供す
- ・ 祝詞を奏す
- ・ 齋主玉串を奉りて拝礼
- ・ 参列者代表玉串を奉りて拝礼
- ・ 神饌を徹す
- ・ 昇神の儀
- ・ 祭員退下

式典終了後は美須々会館という神社内  
の宴会場に移り直会となりました。

ご挨拶をとということで用意していた理  
事長挨拶を代読しました。

直会では川上隊友会会長を中心に今後  
の慰靈活動についての活発な議論が展開

され隊友会・遺族会・崇敬会が連携して  
今後も宮司を中心に継続していくとのこ  
とでしたので来年は会報に告知して一般  
会員の参列を促したいと思えます。





旧海軍航空隊串良基地出撃戦没者追悼式  
参列報告

専務理事 石井光政

令和4年10月15日(土)、鹿屋市串良町の旧海軍航空隊跡地に作られた、平和記念公園慰霊塔前広場に於いて、平成30年実施以降、4年ぶりの通常開催で、県外の方々を交えた追悼式が実施された。(令和元年は台風により中止、令和2年3年はコロナによる縮小実施)

晴天の下、以前と同様の約120名の方々が参列された。(ご遺族13名、串良勤務旧軍生生存者3名、児童生徒16名を含む)式は、10時30分の開式の辞から始まり、国旗・海軍旗の掲揚、国歌斉唱等済々と行われ、海上自衛隊鹿屋基地の儀仗隊、ラップ隊、航空機の追悼飛行等の支援を受け、1時間半の追悼式は、厳粛、かつ盛大に行われた。

その中で、旧軍生生存者の代表として、有田焼陶芸家の人間国宝で予科練出身の井上萬二氏が亡き戦友の遺書と共に、万感の思いを込めて追悼文を読まれたので、ご本人の了解を得て、その全文を紹介いたします。

追悼の言葉

本日、53回旧海軍航空隊串良基地出撃戦没者追悼式が挙行できることに感激ひとしおであります。

串良町、串良町民に敬意を表します。当時の若き青少年が未曾有の国難に殉ぜんと大空の防人を目指して全国から集まり、自らを求めて鉄壁の訓練に耐え、過酷な訓練、強靱な精神力を叩き込まれその志を果した573柱の若き英霊たちに生存者を代表いたしまして謹んで哀悼の言葉を申し上げます。

戦後77年、民衆平和国家として世界の平和を目指してまいりました。今日の繁栄も幾百万の尊い犠牲にあることを忘れてはなりません。当時、20歳にも満たない若者たちは自らの命を捧げることによって国家が・同胞が救われる、祖国の安泰を祈りながら身の犠牲を顧みず敢然として死地に赴いた至純志向の若者たちへの鎮魂の意味もあります。

青春のすべてを投げうって、鬼神のごとき攻撃を敢行し再び還らざる500数十名の多くの攻撃多隊の業績はその家族と国を憂う純粋なこころとともに永く歴史にとどめなくてはなりません。鞭うたれ、鍛えられてようやく一人前のパイロットに育ったばかりの彼らにあてがわれた

飛行機は250kgの爆弾を装着した戦闘機です。

この慰霊は、二十世紀を生きる日本の若者悲劇を刻む碑であり誇り高く短く燃えた青春の記念碑であると感じます。

ここで、いち海軍飛行予科練生の手記を読ませていただきます。

【遺書】

神風特別攻撃隊菊水部隊・銀河隊  
海軍一等飛行兵曹

第十七期乙種飛行予科練習生

本仮屋 孝夫 鹿兒島 18歳

兄上様お喜び下さい。この度、特別特攻隊員に選ばれて、明日いよいよ出撃することになりました。

大君の御為に役に立つときがきたのです。男子の本懐此れに過ぐるものはありません。

笑って突っ込んでいく覚悟です。万里の怒涛を乗り越えて敵陣に黒丸一家が、殴り込みを掛けるのです。こんな愉快なことはありません。

兄上様にも喜んで頂けると思っています。生きて還らぬ決死の突撃隊です。出水に居る頃は本当にお世話になりました。深く感謝しております。御恩は、死んでも忘れません。

姉上様にも宜しくお伝え下さい。

「男子に生まれ 空征かば 雲染む屍  
悔いあらじ」

歌にもあります。

大空の果て、玉と砕けるは、我々の最も本懐とする所です。桜の花が世の人の愛されるのは、散るからです。人間死に場所を逸したらろくな最期は遂げられませんが。私が死んでもどうか、悲しまずに大君の御為によくぞ死んだ、天晴れな最期だったと誉めてやって下さい。

兄上様、姉上様、憲ちゃん、敬ちゃん達、健康を草葉の陰より祈っております。さようなら。

花は桜木 陸爆乗りは 若い命を 惜しみやせぬ

花のつぼみの 二十歳で散るも 何か惜しまん 君のため

還らじと かねて思えば 梓弓 咲く春を 待たずして 我は散るなり

昭和20年3月18日 第762海軍航空隊  
262飛行隊陸上爆撃機「銀河」偵察員  
800キロ爆装 0700築城基地発進  
九州東方機動部隊攻撃戦死

戦争とは、勝者であれ敗者であれ大小の差こそあれ、尊い人命の犠牲が伴うことにかわりません。

戦争体験者はもちろん、戦争を知らない世代の人達も戦争によっていかに尊い生命が失われていったのかを知っていたべき今の日本の平和が永遠に続くことを祈っております。

と同時に若くして散華した戦友たちの鎮魂の場となれば私たちのこの慰霊が続くことが望外な喜びです。

私も生ある限り喪心より慰霊させていただきます。

令和4年10月15日  
海軍予科練習生 井上萬二



井上萬二氏



海上自衛隊による慰霊飛行

大阪護國神社特攻勇士慰霊祭に参列して

原 知崇

秋らしい青空に恵まれた令和四年十月二十三日、七五三で参拝される家族連れの晴れやかなお顔が行き交う大阪護國神社において、特攻勇士慰霊祭が特攻慰霊顕彰会により催行されました。

この特攻勇士の像は平成二十一年十月二十四日に大阪護國神社に奉納、第一回特攻勇士慰霊祭が開催されて以来、特攻隊戦没者並びに準特攻戦没者五百二十八柱を顕彰しています。

当会からは私と四谷委員の二名が参列いたしました。私は大阪護國神社に向うのが初めてでしたので行事前に各所を見



学させて頂きましたが、大阪に縁を持つ陸海軍部隊等の慰霊碑が立派に整頓され清々と並ぶ様は、関係各位のご尽力の賜物であると強く感じました。

また、本殿に軍艦矢矧の艦首御紋章が奉安されているのを拝見しました。この防護巡洋艦矢矧は大正七年にシンガポールで上陸した乗員が、当時世界的に猛威を奮っていたスペイン風邪を艦内に持ち込んだことにより、今でいうクラスターが発生した状態となったことで乗員、便乗者のうち副長以下四十八名が亡くなる惨事となったことで知られるフネです。新型コロナウィルスの影響がまだ続くこの世界にあって、この事件から学ぶべきことが多くあるのではないかと思いを巡らせました。

式典は十一時から始まりました。国歌斉唱、黙禱に続き、加賀本昭雄男会長による祭文の奏上、盛田節夫理事による吟詠奉納がありました。軍籍にあった方は残念ながらご参列者の中にお見かけ出来ませんでしたが、議員関係、近畿偕行会、水交会など自衛隊OB関係者をはじめ、この碑を守り英霊の顕彰を伝えるの決意を参列された皆様のお言葉の端々から感じるものがありました。

式典後は陸上自衛隊中部方面音楽隊による演奏がありました。「愛国行進曲」に始まり、陸海軍の曲、自衛隊の曲、また市井のヒット曲と様々な曲が演奏されました。コロナ以来、こうした演奏を耳にする機会がなくなり、久々に本物の

「音楽」に触れた我が身としては、音楽の持つ力を感じずにはいられませんでした。音楽隊から音楽隊と少し名前は変わっても、兵士を慰め、奮い立たせ、また兵士だけでなく、イベントや災害派遣などの場で我々国民を勇気づけ、楽しませてきたその姿はきつと昔も今も変わらないのでしよう。少し離れてその演奏をニコニコと聴いているご家族連れを眺めながら、この情景を守らんがために散っていった若者たちがいたことを、これからも伝え続けていかなければならないのだという思いを今一度、新たにいたしました。



陸上自衛隊中部方面音楽隊の演奏



神風特攻敷島隊五軍神及び愛媛県特攻戦没者追悼式典

評議員 高松 真希

令和四年十月二十五日(日)に「神風特攻敷島隊五軍神及び愛媛県特攻戦没者追悼式典」が催行され、鮎田理事、宮本評議員と共に参列させて頂いたので報告する。

一 概要

第48回神風特攻敷島隊五軍神及び愛媛県特攻戦没者追悼式典は、秋晴れの中、



関中佐の慰霊碑

愛媛県西条市の楢本神社前の広場に於いて催行された。

催行の日には毎年十月二十五日に固定されているのだが、その理由は、特攻第一号である関行男中佐がこの日に散華されたためである。

慰霊追悼式神事と追悼式典の二部で構成されており、その間に追悼飛行が行われる。

神事は9時30分頃より執り行われ、追悼式典の閉式は12時頃で、全体で約2時間20分であった。

コロナ禍であり、3年ぶりの式典となり、参列者は通常200〜250名のところ今回は150名ほどにとどめられたものの、ご遺族、戦友、来賓、一般参列者等は日本全国から集まった。

追悼飛行は10時15分頃から開始され、赤十字飛行隊の4機が式典会場と関中佐の慰霊碑の真上を飛来した。今回隊長を務められたのは、御年91歳の米山徹朗氏で、その力強い飛行に拍手が送られた。その後の慰霊追悼式の式次第は次の通りである。

- 1 開式の辞
- 2 国旗・軍艦旗掲揚
- 3 国歌斉唱
- 4 追悼のことば

- 5 黙祷
- 6 儀仗の礼
- 7 式辞
- 8 追悼の辞
- 9 献花
- 10 追悼の歌
- 11 旧海軍儀仗
- 12 追悼電報の披露
- 13 合唱
- 14 謝辞
- 15 軍艦旗の降納
- 16 閉式の辞

追悼のことばの中で野田ゆり子氏は「インターネットの普及により、遠路はるばる楢本神社に建てられた特攻記念館を訪れる方々も年々増えている」と述べられた。

式辞の中で奉賛会会長の村上俊行氏は前述の特攻記念館について言及され、建替えを計画していることを話された。

追悼の歌は、大正琴で2曲、コーラスで2曲が披露され、「関中佐功績顕彰歌」も歌われた。

謝辞で、御遺族代表の桑村周二氏は、桑村坦上飛曹の辞世の句を紹介して下さった。

「我が後に 続かむものは数多し  
吾は信じて 特攻機で往かむ」



長崎縣護國神社「特攻隊慰靈祭」に参列して

理事 鮎田 英一

長崎縣護國神社に特攻勇士の像を奉納させていたから1年が経つ。昨年10月22日、「特攻勇士の像」の入魂祭が続いて10月26日、秋の例大祭日に「特攻勇士の像」除幕式が斎行された。この日程は、除幕式には県知事、国会議員、県



長崎縣護國神社

会議員、地方自治体の長など多くの公的役職者が参加することから、神式の入魂祭と除幕式を別立てにするという工夫と配慮のためであった。

令和4年の秋を迎え、長崎県では地域の一大行事である「長崎くんち」開催が見送られるなど、まだまだコロナ禍前の日常に戻る状況ではなかったが、関係者の方々が慎重に検討を重ね、入魂祭から丁度1周年に当たる月次祭の佳き日である令和4年10月22日に「特攻隊慰靈祭」が実施される運びとなった。



特攻勇士の像

長崎縣護國神社氏子総代、日本遺族会、英霊にこたえる会、長崎県隊友会、並びに建立に尽力いただいた特攻隊戦没者慰靈碑建立実行委員会（昨年の奉納建立後に解散）等の方々を含め、約20名が参列する中、本殿内において長崎県出身特攻隊戦没者を含む、ご祭神に対し厳肅な神事が斎行された。本殿横の「特攻勇士の像」は、建立から1年が経ち、すっかり境内に落ち着いた風情であった。

長崎縣護國神社は、昭和20年8月9日の原爆投下により本殿以下悉く灰燼と帰したが、昭和38年10月に再建され、戊辰戦争から大東亜戦争までの国難に殉じた

宮司の村田様は、護国神社内に「特攻隊戦没者慰靈顕彰会」を設立し、慰靈祭の斎行場所・時期などを含め、如何なる形の慰靈祭を末永く続けていくべきかを真摯に検討されている。地域に根差した、このような奉賛会的な組織の裏付けがないと、慰靈顕彰祭の安定的斎行は困難を伴うものであり、当顕彰会としても関係者の皆様のご努力に呼応して、微力を尽力していかねばとの思いを強くした。



天皇陛下皇后陛下御親拝記念碑

長崎県関係の英霊約6万柱がご祭神としてお祀りされている。境内には多くの慰靈碑、顕彰碑があり、特攻勇士の像は新たな慰靈顕彰碑として、本殿横の天皇皇后両陛下御親拝記念碑（昭和46年建立）近くに建立された。

令和四年度フィリピン特攻戦没者慰霊に伴う現地訪問等

理事 福江 広明

令和四年十一月二十一日(月)から三日間、評議員・及川昌彦及び会員・木村達人の同行のもと、在フィリピン日本国大使館(以下、在比大)との入念な計画に基づき、首都マニラ、マバラカット及びアンヘルズ両市等を訪問し、特攻顕彰碑の建立及び維持に尽力した現地の特攻慰霊貢献者に対する在外公館長表彰の式典に参列するとともに、慰霊各所を参拝したことを、所見等と合わせ報告する。



特別攻撃隊の碑

### 一 全般

フィリピン滞在中は、常に天候に恵まれ、気温も昼夜の寒暖の差こそあったが、当初計画どおり円滑に行動でき、所望以上の成果が得られた濃密な三日間であった。これは、現地にて当会から外務省への便宜供与依頼に従って空・海自両防衛駐在官(秋葉和明1等空佐、関根健陽2等海佐)、並びに当会の現地慰霊を二十年以上にわたり支援いただいている現地在住の竹内ひとみ氏(今回の表彰者のお一人でもある)が全日程に常時同行していただいたおかげである。

今次の現地訪問の特徴は、①従前の慰霊祭の実行日(例年十月二十五日「敷島隊」によるレイテ島の米艦隊に対する出撃日)と時期を違えて当会単独による実施②在比大が主催する特攻慰霊顕彰にかかる在外公館長表彰の式典への出席③自衛隊機の海外運航時における地上支援業務契約を通じて海空自と信頼関係にあり、かつ特攻慰霊に高い関心を持つ現地企業の表敬であった。

なお、日程の概要は次のとおりである。  
 ■初日…午前中に羽田から空路、マニラ入り。先述の三名の方と合流後、大使公邸にて在外公館長表彰式等に出席。

■二日目…マバラカット市行政当局の表

敬、同市内及び周辺の各慰霊の地にて参拝。最後はリベラト・ディソン邸(今回のもう一人表彰者で、故ダニエル・ディソン氏(以下、父ディソン氏)の長男)にて資料室内の展示物の見学。

■三日目…直近では、海自US-2×1及び空自F-15×2機の地上支援を実施したイージス・アビエーション・センター(民間企業)を見学。午後、マニラ空港から帰路に就く。

### 二 細部

(一) 大使公邸での在外公館長表彰式出席

式典開始一時間前に会場となる大使公邸に両防衛駐在官と共に到着。越川和彦大使及び令夫人に表敬後、公邸内展示品の拝覧及び表彰者のリベラト・ディソン、被表彰者家族であるダノン・ディソン(表彰者の弟)及びマヤ・ディソン(表彰者の妹)各氏と挨拶。午後五時表彰式開始。越川大使による受賞者の功績紹介に引き続き表彰状の授与が行われた。ディソン氏、竹内氏の順で受賞者の謝辞があり、個別・集合の各写真撮影並びに現地メディアの取材が終了した以降は、公邸の庭及び公室において表彰者及びその家族との歓談時間となった。

父ディソン氏の思い出、特攻に対する



思い、父親の意志の継承等に関する質問にも優しい笑顔で応えてくれたことが印象的であった。

なお、関連の詳細記事として、①在フィリピン日本大使館が開設しているFacebookの十一月二十二日付の記事及び②現地マニラ新聞記事 (<https://www.manila-shimbun.com/category/society/news267868.html>) をご覧いただきたい。



表彰式における集合写真

(二) マバラカット市観光局への挨拶  
慰霊顕彰碑等の設置場所が同市の管理地域にあたることから、各所での参拝に先んじて観光局のアルウィン・リンガット氏を表彰。現地平和式典参列の關係から市長を表彰する予定であったが、当該日は市長不在であり代行として先の職員に対応いただいた。同氏と両防衛駐在官の間で、今後の特攻隊の慰霊祭運営及び慰霊碑の維持管理等について意見交換が行われ、当会としても来年以降の慰霊顕彰地の訪問要領等を検討する上での資を得た。

(三) 慰霊顕彰碑等への参拝  
滞在二日目の午後は、平和観音宮、神風東飛行場平和記念碑、マバラカット西飛行場を車両移動により順次参拝した。



観音像

参拝者は当会参加者三名、両防衛駐在官、竹内氏の計六名。また各所では竹内氏に準備いただいた供花、靖國神社のお神酒をはじめ日本国内からの持参品等を供えた。

特に、平和観音宮では、参拝に際して平成二十九年この地を訪れた当会評議員の太田兼照の行為に倣い、「特攻平和観音経」を誦すること、英霊を供養した。

(四) デyson邸の資料室見学

マバラカット市は首都マニラから北方へ約百キロ。Dyson邸は、そのマバラカットの近郊であるアンヘルズ市内に建つ。その邸内の一角に「カミカゼ博物館」がある。故ダニエル・Dyson氏が資料館として開設して半世紀近い間に収集した特攻隊員の遺品、自ら描いた特攻隊員の肖像画をはじめ多くの特攻関連の品々が所狭しと展示されている。

国籍に関わらず特攻の歴史を学ぶ貴重な空間であった。来館記念として拝受した関行雄大尉の肖像画(一連番号付きの写真)は、21頁に掲載。

(五) 現地の航空機地上支援会社の見学  
今回同行した木村会員は、防衛大学校二十五期生で私の同期である。彼も航空自衛隊に入隊後、主に航空管制の分野で職務を全うし、七年前に定年退職。現役の



グラハン社訪問

間、在フィリピン防衛駐在官の勤務経験があり同行者として最適任と考え、私から同行を要請し、快諾してもらったわけである。

その彼からフィリピンを離れる前に、わずかでも時間があれば、ぜひ在比大勤務時に空自航空部隊が在外運輸で支援してもらった現地のお社に向いて謝辞を伝えたいとの要望があった。このため、今回日程に組み込んだものである。同会社と防衛省自衛隊、同社長と特攻慰霊のそれぞれの関わりについては、四項に記

した彼の所感をご覧いただきたい。  
三 二つの所見

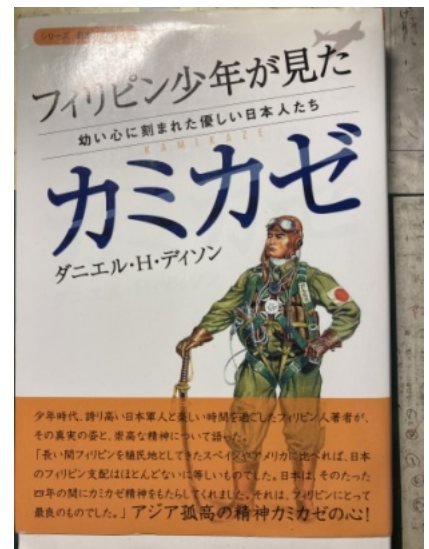
(一) 父デイソン氏(ダニエル・H・デイソン)の偉大な功績

先に紹介した表彰式において、越川大使が述べられたお言葉から、リベラト・デイソン氏が「日比両国の歴史を思いやりの観点から相互理解することを醸成させた人物」と、また竹内氏が「特攻慰霊の支援を通じて日比の信頼関係促進に努めた人物」と高く評価されていることをあらためて知ることができた。

この両名の方による今日までの特攻に関する認知努力に多大な影響を及ぼしたのが父デイソン氏である。つまり今回の在外公館表彰をもって父デイソン氏の生をかけた活動が功績として公認されたことになる。この結果をきっかけにして

日比両国民に特攻に関する認識をいっそう深めてもらい、ひいては両国安全保障の深化に結び付くことを期待したい。そのため一人でも多くの方に父デイソン氏の著書「フィリピン少年が見たカミカゼ」を読んでもらいたい。

当時の外征日本軍の非道性と、誠実にして思いやりある日本の国民性の両面から偏りなく淡々と事実を書き貫いている秀作だと思う。大東亜戦争終結に向けて難局を極めたフィリピン方面作戦の現場



部隊で何が行われていたのかをあらためて世代を問わず読んでいただきたい。戦史関連の図書を紐解いても、見えない、見えていない所に目を向ける事こそ、勝敗とは別に戦争の正体を知る上で大事なのではないだろうか。

(二) 現地慰霊祭の関与の在り方

コロナ禍以前に催されていた現地の特攻基地平和式典の運営主旨及びその要領については、従前から地元行政当局と在比大との間でも意見のやり取りが行われていた。

今回の表敬時における現地比当局側の見解からは、地域の公共性を高めるために当該式典を拡充するとともに、特攻記念碑が設置されているクラーク特区内の敷地整理を図るとの意向が強いように見受けられた。加えて当局はいずれの施策



も少しずつ着実に進めたいようだ。こうした政治と宗教が絡み合っている当局の打つ手に在比大は戸惑いがある。また竹内氏にしても西飛行場記念碑の存続に危機感を持たざるを得ないだろう。

この問題の解決にあたっては、当会も在比大と密接に連携して情報の共有に努めるとともに、今後のこの問題に対する関与姿勢を明らかにし、来年以降の現地式典への参加対応を決めなければならぬ。そもそも論で恐縮であるが、本来、特攻基地平和式典の目的は、特攻隊戦没者の慰霊及び世代継承である。そしてこの大目的を達成するために、学校、地域、家庭のレベルでの教育を行い正しい歴史観を持たせ、とりわけ若年世代に顕彰の場である平和式典への積極的な参列意欲を沸かせることが最も大切なはずだ。

それを歴史観の未醸成や顕彰性の認識不足を脇に置いた形で地域住民の参集効果だけを高める方法は全く同意できるものではない。特攻戦没者慰霊の本来意義が少しでも薄められることがあってはならない。

もしそうなれば、それ自体、俗っぽい単なるイベント性の強い祭典でしかありえない。いずれにしても、当会として現地式典の継続参加の対応、慰霊碑等の存続を追求する方向性を早急に見出すことが

必要であろう。

四 同行した木村会員の所感

「東洋の真珠」と呼ばれるほど美しいとされるマニラ湾に沈む夕陽。

太平洋戦争末期の戦火激しい中、フィリピンのマバラカットから出撃した神風特攻隊の隊員は、その日を迎えるにあたって、燃え盛る愛国心と家族への思いをマニラの夕陽に重ねたかもしれない。



関大尉肖像画 (ドイツ氏作)

今回二十一年ぶりに訪れたフィリピンで、在職時には出来なかつた特攻慰霊廟等参拝をはじめ当時知り得なかつた戦時中の様子を学び、また戦後慰霊碑の建立・維持、さらには今日に至るまで写真等関連品を自宅で展示・公開し続けて来られた故デイソン氏並びにご息家族、そして現地在住の日本人として地元との調整や慰霊廟等の管理、案内等に尽力されて

いる竹内氏とも知り合うことが出来、私にとって本当に貴重な訪問となった。

また先述の「Ages Aviation Center, Inc.」という会社は、フィリピンに飛来する航空機のグランドハンドリング会社として有名で、自衛隊もこれまで長きにわたって大変お世話になっている。最近では空自戦闘機F-15、海自飛行艇US-2も支援している他、世界各国の要人専用機や軍の航空機が訪比する時にもグラハン会社として実績を積み重ねて来ており、今や日本にとっても信頼のおける大事なグラハン会社となっている。

社長のサロンガ氏には、私が在比防衛駐在官当時から、今後も引き続き我々の良好な関係維持と自衛隊機に対する万全の支援をお願いしていたことから、今回の慰霊訪問の機会を得て、帰国直前に空港敷地内にある彼の会社を訪問できたことはこの上ない喜びであった。

旧交を温める会話の中で、サロンガ氏が自らもマバラカット訪問時に、特攻慰霊廟を参拝している事実を知り、特攻の意義を正しく認識してくれていることには、顕彰会による比国特攻戦没者慰霊訪問が今後も続けられることを切に願っている。

第四十九回若潮慰霊祭に参列して

評議員 高松真希  
専務理事 石井光政

令和四年十一月二十三日(水)、「第四十九回若潮慰霊祭」が、香川県小豆郡土庄町にある富丘八幡神社にて催行された。

この慰霊祭に、石井専務理事兼事務局長と共に参列させて頂いたので、概要と所感を述べさせて頂く。

一 慰霊祭の概要

若潮部隊を慰霊する「若潮の塔」は、富丘八幡神社の敷地内の、海を見下ろせ



富岡八幡神社の社務所

る位置に建立されている。若潮の塔の建立が昭和四十八年十一月二十三日であったことから、慰霊祭の日取りは毎年十一月二十三日と決められている。

例年、この若潮の塔の前で慰霊祭が催行されるのだが、今年は雨のため、富丘八幡神社の社務所内にて執り行われた。

十時から新嘗祭、十時半から氏子総代が催され、慰霊祭は十一時から催行される予定であったが、強く冷たい雨に打たれて屋外で待つ慰霊祭参列者に配慮してくださり、氏子総代が終わるとすぐに社務所内に通して頂いた。そのため、予定よりかなり早い時間に慰霊祭が始まった。参列者は、慰霊祭を主催する若潮の塔奉賛会会員、御遺族関係者、来賓等の三十数名で、この数年、ほぼ横這いとなっている。しかし、若潮部隊のことをメディアで知った方が参列されるなど、新しい動きも出始めている。

式次第は次の通りである。

- ・ 修祓の儀
- ・ 降神の儀
- ・ 献饌の儀
- ・ 祝詞奏上
- ・ 玉串奉奠
- ・ 撤饌の儀
- ・ 昇神の儀

直会はコロナ感染を防ぐために今年も中止された。  
(高松真希 記)

二 若潮慰霊祭参列所感

初めての香川県訪問、初めての小豆島訪問、初めての若潮慰霊祭参列で、全てが新鮮に映り、伺つて良かったと感じた。

若潮慰霊祭当日は生憎の雨(49回目のうち雨は2回目との事)。私は晴れ男と思っていたが、英霊のお叱りを受けた感じであった。このため、例年、若潮の塔の前で行われる慰霊祭は、社務所の中であったが、三木宮司、丹生年一若潮の塔



社務所内に設けられた祭壇





奉賛会会長を始め、30数名の方が参列し、厳かかつ濟々と斎行された。

ご英霊のお怒りも解けたか、終了時には雨も上がったので、山を少し下ったところの「若潮の塔」に参拝した。塔は、昭和48年（1973年）建立。今年でちょうど50年を迎える。また、島内の隊員たちの生活していた場所や、海軍の特殊潜水艇が訓練していた場所にも訪問し、慰霊の誠を捧げることができた。

神社は山の上にあるので、そこからは

瀬戸内を行き交う船や、遠くの島々まで良く見えた。波が静かで穏やかな入り江が多いが、このような所で、国家の行く末を案じて、身の危険も顧みず、多くの若者が厳しい訓練をしていたのかと考えると、胸が締め付けられた。世界では紛争や戦争が絶えないが、このような不幸が日本に降り注ぎ、国民が命を投げ出さずに良いような環境を作り出してもらいたいと切に願った。

住の多田野弘氏（102歳、株式会社タ

ダノ特別顧問、当会報にも寄稿）のご自宅を訪問し、特攻顕彰会へのご支援に感謝を申し上げるとともに、戦時中のラバウルやフィリピンマバラカット等の激戦地での勤務の様子等をお伺いできた。ラバウルでは私の父と同じころに勤務されていたようで、写真も拝見したが、行った事もないのに懐かしさがこみ上げてきた。いつまでもお元気にお過ごしただきたいと願ってやまない

（石井光政 記）

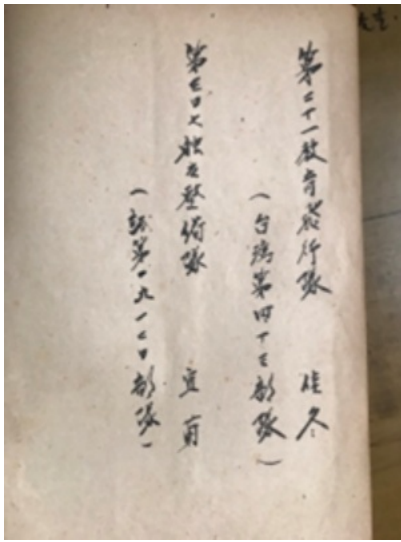
特別寄稿

台北駐福岡弁事処長 陳銘俊

令和4年5月14日、福岡縣護国神社で行われた第10回福岡県特攻勇士慰霊顕彰祭に参列する機会を得た。数カ月前に訪れたばかりの人吉市海軍航空基地の事が思い起こされ、併設の資料館に展示してあった父母への感謝と御国のために忠誠を誓うとしたためられた特攻隊員による手紙、「特攻勇士之像」、ご参列のご遺族とが重なり、目頭が熱くなつた。毎年のようにここでご遺族や来賓をはじめとする多くの方の参列のもと特攻隊戦没者慰霊顕彰が静かに続けられていること、靖国神社はもとより日本各地で肅々と慰霊活動が行われていることに敬意を表したい。

当時の九州には知覧、都城、大刀洗など各地に特攻基地があり、そこから多くの若者が出撃していった。日本がポツダム宣言を受託した後も、受け入れることができず出撃した隊員もいるようだ。地理的に重要な位置にある台湾にもまた特攻基地があり、台湾人を含む多くの若者が出撃していったことは、現在の日本では余り知られていないという。少しでも皆様にお伝えできればと思う。

終戦後、ある日本人特攻隊員が日本帰国を待つ間にまとめていた記録写真真をこの寄稿で何点か紹介させていただきたい。



当時20万人以上の台湾の若者が日本の軍人・軍属として前線に向かい、3万人を超す戦死者を出した。日本本土ほどではないが、米国の爆撃機による空襲を受

けた地域もある。

台中・台南・新竹・宜蘭の四か所に特攻基地があり、神風特別攻撃新高隊などの特攻隊が編成され44名が招集を受け、硫黄島や沖縄に向けて出撃したという。

アメリカ軍に特攻攻撃を加える10次にわたる菊水作戦においては、新竹から7回32機の出撃、台南からは1回8機、宜蘭からは3回46機の出撃があり、合わせて86名もの尊い命が奪われ、その中に台







湾人も含まれている。台湾に残る特攻の記録は、日本名で残されたものがほとんどであり、日本人なのか台湾人なのか定かではないものが多いのだという。

特攻からの生還者、張正光さん（彰化）という方の話を聞いたのでお伝えしたい。張さんは当時17歳、成績優秀な青年で日本でも勉強した経験を持つ。宜蘭での任務につき、太平洋戦争で最も悲惨といわれる沖縄上陸戦においてアメリカ軍艦に向け出撃、その際自分の信念で海に飛び込み、泳いで島に渡りアメリカ軍の捕虜になって特攻から生還した唯一の台湾人といわれている。宜蘭で余生を送った。人当たりの良い張さんであったが、自分が特攻の生き残りだということを誰にも話さず、周りの人は誰一人として張さんが神風特攻隊員だったことを知らなかつ

たという。当時の台湾人は信頼や忠誠の面で内地の日本人に負けているという意見があったそうだ。しかし台湾籍でありながら日本人に負けず劣らず日本人であることを誇りに思っている、そしてそれを証明したいと考える台湾人も少なくなかったと聞くことがある。張さんのプレッシャーはいかほどであったか、張さんはインタビューを受けた12日後に亡くなったという。

当時、台湾の若者の心の中には飛ぶという夢があったのかもしれない。1910年、日本人は航空事業を展開し、1914年、新しい科学技術を台湾に持ちこんだ。1930年代には台北に飛行場が完成し、時代とともに多くの少年飛行兵が招集され訓練を受けている。太平洋戦争中は飛行場が爆撃の標的にもなった。血を流し、助け合い、まさに生死をともにした間柄、命の間柄なのである。旧日本軍として日本兵士として戦った台湾人は二十万人以上、死者三人、大変重い数字であり、忘れてはならない数字であることは



言うまでもない。

私が生まれ育った故郷・台湾東部の花蓮にも遺跡が残っている。幼い頃は、どういふ建物がよく分からないまま前を通っていたものだが、「松園別館」という名前の建物は旧日本軍の高級将校クラブ兼司令部で、神風特攻隊の隊員が出撃する前日には招待所として使われていたそうだ。台北の北投には「北投文物館」という同様の建物がある。純日本家屋の典型として台北市の古跡に認定されており一見の価値があるので、ご訪台の折には足をお運び頂きたい場所の一つだ。

日本の若い人の間では知らない人もいるかもしれないが、かつて台湾は日本の一部であり半世紀もの歴史を共有した過去がある。日本による近代教育の中で、台湾人は日本人の教師から、嘘をつかない、不正なことはしない、自分の失敗を他人のせいにはしない、自分のすべきことに最善を尽くすなどの武士道精神を学んだ。「勇氣」「誠実」「滅私奉公」「自己犠牲」「責任感」「遵法」「清潔」などの精神は戦後も台湾に残り、その後「日本精神」という固有名詞まで生まれたほどだ。日本の建築物や文化は今もなおあちこちに残り市民生活に関わっている。八田與一が造った烏山頭ダム、鳥居信平が造った地下ダム(二峰?)、現在

台湾総統府として使われている台湾総督府など、日本が遺したものは当たり前のようにそこにあるものなのである。台湾人は世界一の親日国といわれ、世論調査の「好きな国」ではいつも日本がトップになり、コロナ前には人口の4人に1人に近い割合が日本に来ていた。日本と台湾は地震や水害、台風やコロナなどの災害時にはお互いに真つ先に駆け付け、義援金を出し合う仲であり、東日本大震災の時には台湾の市民から250億円もの義援金が寄せられたほどだ。単に仲がよいというレベルを超えた兄弟の国と云ってよいのではないだろうか。

2022年7月凶弾に倒れた安倍晋三元首相は「台湾有事は日本有事」と発言され、全世界の自由民主を愛する国々に対し独裁国家に注意の目を向けるよう呼びかけた。昨今の世界情勢を見れば、多くの政治家や企業が独裁国家の巨大マーケットに目がくらんでいるといえるが、これによって民主国家は独裁国家の野心に目が覚めた。日本もそろそろ短期的な利益だけでなく安全保障を含めた長期的な視野に立つ節目に来ているのではないかと、本当に信頼できる国と手を組む時期になっていくのではないだろうか。台湾と日本は日本精神や日本語、義理人情文化、生活飲食習慣、歴史的関連性や国民

感情も似ている、互いに信頼が厚く、経済的にもお互いに第3、4位のパートナーであり、地政学的に運命共同体なのだ。ウクライナ侵攻を受け、台湾では自主国防の意識がますます高まっている。

「今日のウクライナは明日の台湾」という言葉が流行り、政府は民間防衛ハンドブックを作成し、スマートフォンアプリを使った防空壕の探し方や水や食料の補給方法、緊急時に備えた救急キット準備のコツ、停電の対処法、空襲警報の識別法、防空壕の避難方法などを詳しく説明している。今は平和時だが「最悪のシナリオ」を想定し、さまざまなシミュレーションを提言し準備していることを日本の皆様にも知っていただきたい。「台湾有事は日本有事」そして「日米同盟有事」でもあるのだ。

私は2018年7月、台湾総統府機要室主任(室長)の重責を命じられた。総統府の建物は以前の台湾総督府そのものであり、長い歴史が刻まれている場所である。福岡出身の明石元二郎第7代総督の時代に完成し、台北大空襲により爆撃を受けた建物は、その後の補修を経て、現在総統府として使われている。様々な歴史が刻まれる総統府で勤務すること、特に私の執務室のすぐ隣が爆撃を受けた場所ということもあり、自分がここで今、

台湾のために勤務しているという現実を考えると身震いがし、常に自分が奮い立つのを感じていたものだ。福岡県出身の明石総督は、亡くなった後も台湾を護るとの遺言を残され、自分の故郷ではなく台湾に骨を埋めた。台湾人の心に深く刻まれ尊敬されている方だ。まさか自分が明石総督の故郷・福岡に3年後に総領事として赴任するなど想像もしていなかったことである。誠に感慨深く、その不思議な御縁と自分の使命を強く感じざるを得ない。

台湾と日本は、自由、民主主義、基本的人権、法の支配といった共通の価値観をもち、困ったときには心から相手の助けになりたいという気持ちでお互いを支え合う家族・兄弟のような関係だ。「唇亡齒寒」―唇がなくなれば歯が寒くなるように、歴史的にも地理的にも切っても切れない関係、運命共同体なのである。私は次世代に兄弟のバトンを渡していくべく、これからも両国の相互理解と信頼関係を進化させることに努めてまいりたい。引き続き皆様のご支援をお願いするものである。



旧台湾総督府庁舎（現台湾總統府庁舎）



多田野語録  
「運鈍魂」

會員 多田野 弘

運、鈍、根の運とは、巡り合わせとか予想外の吉凶禍福の出来事をいい、鈍とは、粘り強く続けて止まないこと、根とは、根気と根性の氣力をいう。これをどう考えるかは、私たちの人生を通した命題の中で大きな比重を占めている。ゆえに、運、鈍、根の三つが人生に大きく関わっているのは、皆十分弁えていることである。しかし運は、自ら与り知らぬ天命のようなものだが、鈍と根は自分がつくり出すものという違いがある。

普通は、運命を「決まりきった人生の予定コース」で、動かすことができないもののように解釈しているが、宿命のように固定的ではなくて可変的である。つまり、運命をどう受け止めるか、その受け止め方と対処の仕方によって、どのようにも変えられる。運命は天の配剤であるとともに、自らつくるものと考えながら、運命はどうにもならないものではなく、私たちの修養によって変化させ、創造し得るものといえる。

誰でも、不幸や災難に遭えば、「どうして私だけがこんな酷い目に逢わなければならぬのか」と、運命を呪うだろう

が、それは間違っている。病気になる、盗難に遭う、怪我をするなどのすべては、予め私たちの生活の中に織り込まれていて、それなしには生きることができないのではないか。ならば、それを嘆くよりも、平然と受け入れ、冷静に対処した方がどれほど賢明かしれない。

運命はその素材を与えるだけで、それを私たちの責任においてプラスにもマイナスにもできる。運命より強いのは人間の精神である。何かが起こった時の私たちの対応の仕方を全く違ったものにするからだ。いいことばかり起こるものではないと、運命の全てを肯定することである。それは無力の諦めでも、戦いの放棄でもない。苦しくとも、それは丁度、自分にとって必要だったことのように受け容れるのである。

運命には指一本逆らえないと思つてしまえば、人間は運命に操られるロボットと化し、人間の自主性や主体性、自由をなくしてしまふ。人間は運命を創るからこそ存在理由があり、そこから自由や主体性、創造性が生まれる。

私の人生は、運命に叩かれ、鍛えられ、苦しむことがなかったら、形成できなかった。青年期の3年間に過ぎた過酷な戦場の体験から、運命をどう受け入れれば

よいかを学ぶことができた。必ずやってくる逃れられない死の運命を、進んで受け入れた瞬間、解放された自由と、計り知れない大きな精神的支柱を得られたように思う。勇気を百倍にしたのである。あの辛く悲しい惨めな思いは二度と味わいたくないが、運命とはそういう選択可能な出来事なのである

不思議にも、好ましくない、避けたいと思う運命ほど、貴重な教訓を含んでいる。反対に好ましいと思う運命には、得るよりも失うものが多いことに注意が必要だ。自分に降りかかった不運を呪う気持ちを捨て、わが身に起こるすべての出来事には必ず意味が含まれており、自分に必要だから与えられたのだと受取るならば、人間として大きく成長できるのではないか。

私は、人生には無意味なもの、無価値なものはないと確信している。挫折も失敗も、病氣も失恋も、プラスにできるからだ。それには、どんな運命に遭おうとも、自分を教育する種は必ず見つかるのだと考えることである。運命は予測できず、例え幸運であっても、有頂天にならず、不運にあつても悲しむことはない。「人間万事塞翁が馬」の例えのように、幸運の裏に災いの種が潜んでいる

し、不運と思われる中にも、幸運の種が隠されている。

フランスの哲学者ベルクソンは「人間というものは、自分の運命は自分でつくっていけるものだということ、なかなか悟らないものである」と述べており、哲学者、西田幾多郎も「環境（運命）によって人間は変えられるが、人間は環境（運命）をつくることができる」と述べている。もし私達が、どんな過酷な運命も引き受ける気になるならば、私が、死の運命を受け入れた時に勇気が湧いたように、やり遂げる勇気が湧いてきて、鈍と根を創り出すのは間違いない。かくして、運・鈍・根は私たちの人生を悔いしないものにならずにはいない。

またこのようにも述べている。「戦争中、多くの死の悲劇に巻き込まれた人々は、その時の情景や感情を決して忘れまい。その辛い経験を通して、他の手段で殆ど得られない成長と人間性を獲得している」とある。これはまさに、私が体験を通して得た考えであり、言いたいことを見事に表してくれている。102歳の今が私の人間的成長の最高の機会であるのを知り、大いに意を強くしている。粘り強く気力をもってさらに成長したい。

**多田野語録**  
**「ほんとうの自分」**

会員 多田野 弘

哲人ソクラテスの言に、「汝自身を知れ」とある。ほんとうの自分を知れという意味であるが、人間として最も知らなければならぬことでありながら、少しも分かっていないのが自分自身である。普通、私たちは自分のことを、私、自分、僕、俺、己などと言っているが、それらの言葉は、一体、自分のどこを指しているのだろうか。

「私」と称している人間の心の中に、二人の私がいるようである。それは、これまで、人間は精神と肉体の結合であり、理性と本能の結合だという見方をしてきた。その結果、一人の人間の中に、理性としての私と本能としての私とがいて、理性によって、本能を統御し支配しているのだと思っていた。ところが、本来「私」は一人であるはずなのに意識の上では、理性としての私と本能としての私という、二人の私をつくっているのだから、どちらもほんとうの自分ではあり得ない。

では、自分の本体は心かと思うだろうが、心は生れてから自では、自分の本体は心かと思うだろうが、心は生れてから自分が作ったもので、コロコロ変わる。心の大部分を占めている理性も、2、3歳頃から言葉を覚え、言葉を事実結び付けていく作業を通じて、考える能力を身につけ、自分がつくり上げたものである。だから、心も理性も合理的にしか考えられない不完全なものなので、「私」の本体であるはずがない。

すると、この身体・肉体が自分を表していると思うだろうが、肉体を構成する60兆個の細胞は、6か月から3年の間に全部生まれ変わっている。ゆえに、身体は3年毎に別人になっているので本当の自分とは言えない。心も身体も自分の本体でないとするれば、ほんとうの自分は何か。

嘗て、もしかすると自分の本体は魂で

はないかと思つた経験が私にある。その一つは、昭和18年末、南方の最前線ラバウルでの出来事である。彼我の戦力の差が日増しに大きくなっており、このまま推移するならば、そう遠くない内に自分の死が免れないことを、下級兵士の私にも感じられた。ある夜、疲れて眠っていたが、心の奥から「びくびくせずには死ね」という声が聞こえてきた。魂の叱声だった。ハツとして、「そうだ！自分の死は祖国に捧げた崇高な行為であり、男子の本懐だ」と思うと、躊躇することなく死を受け容れることができた。それ以来不思議にも、飛び交う弾雨の中を平気で動き回れるようになった。さらに魂の存在を見たのは、最後の戦場フイリピンである。昭和19年10月、わが軍は窮余の一策として、ゼロ戦に爆弾を抱かせ、敵艦に突っ込むという、比類ない特別攻撃隊の編成が決まった。その第一回に、わが2001航空隊が選ばれた。出撃の日、「総員見送りの位置につけ」が令され、第一航空艦隊司令長官。大西瀧治郎中将与水杯を交わした特攻隊員の出撃を厳粛な気持ちで見送った。意外にも、目の前を過ぎゆく彼らの顔は、晴れ晴れとしており、しかも凜として輝いて見えた。もうこれは人間業ではない、神の化身かと思ふほど神々しく感じられた。彼らも私

と同じ、死を受け容れたからだと思つたと震えるような感動を覚えた。私も続いてフイリピンの土になろうと心に誓った。三度の強烈な体験から、自分が魂の存在であることを知ったが、私の推測であり、早合点かもしれぬと思つていた。ところが、魂こそが、ほんとうの自分なのを証明した哲人がいた。

その一人、精神医学者 ビクター・E フランクルの書「夜の霧」が、魂の存在に触れている。

彼はナチスのユダヤ人狩りによつて、アウシュビッツの捕虜収容所に入れられ、夫人はガス室で殺されるが、彼自身は幸運にも虐殺を免れた。彼は収容所の中で、人間が限界ぎりぎりのところに置かれたとき、人間がいかに行動するものかをまざまざと見た。囚人たちは、収容所の役人に追い立てられて仕方なくガス室に死に逝くのが普通であった。

しかし、中には敢然と国歌を歌いながら死に赴いた者がいるし、祈りを唱えつつ従容として死についた者もいる。若者の身代わりになってガス室に入つていった老人もいた。また、たださえ足りない自分のパンを、病人の枕元にそつと残して作業に出ていく者もいた。彼はこれらを見て、こういう尊い意識は人間のどこに宿っているのだろうかと考えた。理性

や本能の衝動的無意識であるはずがない、その層の下にある超越的無意識がそうさせたのだと考えるに至った。私たちが昔から呼び習わしている「魂」のことを言っている。

もう一人の哲人は、ロシアの文豪トルストイである。彼の書「人生の道」に、「魂は肉体に宿り、心と身体を統御し支配する」と断言している。諺にも「心を主とする勿れ、心の主となれ」がある。人間にとつて、魂が主人で、心は、魂の具体化に必要な手段。道具の従者だといふ。

戦後、二人の先哲の書から、私自身が魂の存在であるという考えが、ゆるぎないものとなった。私の価値観・世界観は一変し、人生をつくる原動力となっている。自分をコントロールできる克己の快感は、何にも代え難い勝利の喜びとなり、私の可能性追及の牽引力となつて次々と困難を克服していった。「ほんとうの自分」を知ったことが、今日の102歳の私をつくつたといえる。

### 多田野語録 「生き方の法則」

会員 多田野 弘

生き方の法則とは、どういうことだろうか。私たちの生き方には、動かすことができない、おきて一定理があるように



思う。生き方の基本は、その人が持つ人生の目的如何によって決まってくる。現実にはそれが、物事に対する態度と対処のあり方に表れる。さらに、生き方の結果は必ず自分に返ってくる。ゆえに、生き方が自分の人生を創るといえる。また、私たちがどのような生き方をするかは、本来自由である。だからこそ、どう生きるべきかを自ら定めなければならぬ。

したがって、生き方をかくあるべしと決めるものではない。生き方は、自主的に、自分が選ぶべきであり、万人が違っていて当然である。それは自分が決めて、実行できるものでなければならぬ。そのためには、自分の一生を費やしても悔いがない、生きる目的を持つ必要がある。私は戦場で死に直面してはじめて、何のために生きるべきかを知った。

煎じ詰めるとそれは、死に方を自分で決めたことによる。なぜ生き方を決めるのに、死に方が必要だったのか。それは、死に方が決まってはじめて、積極的、創造的生き方ができたからだ。生きていくという事は、死に近づいていることに気づくなら、誰でも一日が貴重に思えて、意義あるものにせねばならぬという気になる。しかし人は、死を縁起でもないと言

って、考えようもしない。死を考えずして、どうして積極的な生き方ができるだろうか。生と死は表裏一体であって、切り離せない。捨てなければ得られないのだ。凶らずも、この生死一如の心境を、若くして得た私は、何という幸せ者かと思う。

私ほど死に目に多く遭遇した人は、日本中でも稀有だと自負している。かつての太平洋戦争で、3年間、当時の最前線だったラバウルをはじめ、サイパン島、ペリリュー島、フィリピンの4つの戦場で戦い抜いたのである。中でも、私が乗船したサイパンへ向かう貨物船に魚雷が命中し、太平洋の波間に一人漂流した経験もある。幸いに味方の駆逐艦に救助されたが、大多数の同僚は船と共に沈んでいった。その後の各戦場においても、死中に活を得た話は尽きない。当月、102歳を迎えてなのお懇観としているが、裏を返せば実は死に損ないとも言える。

例えば3年間、生死の境を翻弄され続けたが、奇跡的にも生きていた。同時にそれは、思いがけない精神的成果を齎してくれた。その一つは、死んで当然の私が生きられたのは、天の配剤だと信じるようになったことである。以来、生きて

いることだけでも有り難く思うようになり、その恩に報いねばならぬと、しきりに思うようになった。さらには、自分に死を受容させてくれた魂の存在を知ったことである。この二つの精神的成果は、期せずして克己心となって、可能性の追求を容易ならしめ、今日をつくったといえる。

最後に、私がいかに可能性を追求して生きてきたかをお伝えしたい。続く「私の健康増進歴」から「生き方の法則」をくみ取っていただければ幸いである

#### 「私の健康増進歴」

歳に似合わない私の振る舞いを不思議に思うのか、「健康の秘訣は何ですか」「どうしてそんなに元気でいられるのか、長寿のわけはありますか」とよく問われる。次頁の表に示すとおり、凡てが何十年も続いており、多くの方が意志の強さに驚かれる。おそらく誰もが、私の健康法は自分には不可能だと思いうちがいない。ところが、これらは意志の強さとは少しも関係がなく、誰でもできることなので、そのわけを述べる。

誰もが朝、洗面や歯磨きをする。もし怠ると、一日中、不快な気持ちになる。洗面や歯磨きは、すっきりして気持ちが

いいので続くのである。私の健康法もそれと少しも違わない。それを実践すると快いからだ。禁煙を例にあげると、喫煙を我慢する苦しみよりも、困難と思つた禁煙に成功した喜びが快いからである。「今日一日だけ試しに禁煙してみよう」と思つて気負わずに始めたことが、成功への鍵となつた。「今日一日だけ」が続いたのである。

大決心したのでもなく、大した努力もせずにやり遂げた喜びは大きく、「やればできるぞ」という自信が芽生えた。また、何事でもできるといふ自分の可能性を信じるようになった。さらに厳しい目標に挑戦したくなり、自分にチャレンジすることに快感を覚えるようになっていった。まず、アラームなしの5時起床である。朝の起床に他の力を借りるようでは、人間の成長は望めないと思つたのが理由だ。ところが不思議にも、5時になると自然に目が覚めるではないか。そして、早朝の澄み切つた空気へと自然に足が向くようになったのが、次なるジョギングへの始まりとなつた

朝のスタートがすつきりすると、一日中が積極的な動きを伴うようになり、充実した一日となることを実感した。こう

して、次々とさらなる目標に挑戦するようになり、その厳しさや苦しさが大いさほど、やり終えた喜びが大いさことを体得していった。一つの目標を洗面や食事と同じ生活時間に組み入れ、習慣化することによつて、快さを愉しみながら続いたのが、私の健康法の秘策である



実践内容

開始の年齢

終了の年齢

継続年数

禁煙	38歳		続行中
アラームなし起床(5時)	40歳		続行中
ジョギング(起床後 2Km年中無休)	40歳	93歳	53年
冷水シャワー(ジョグ後、年中無休)	40歳	42歳	2年
水泳(ジョグ後、自宅プール年中無休)	42歳	93歳	51年
寒中水泳(元旦、庵治海岸)	44歳	93歳	49年
献血(献血車にて年2回)	60歳	74歳	14年
ハーフマラソン(21Km)	61歳	71歳	10年
寒中水泳(毎年1月3日大的場)	62歳	93歳	31年
パソコンを習得(指と脳の運動)	71歳		続行中
エッセイを毎月創作(脳の体操)	79歳		続行中
水泳(コナミプール)	85歳	94歳	9年



イラスト「孤高の戦士」

元海上自衛官 岩戸博明

私は鹿児島鹿屋の地で高校まで過ごしました。鹿屋は私にとっては故郷のような場所です。自衛隊時代も鹿屋で十数年勤務し、人生で最も長い時間を過ごした。

そのような経緯からも、今回「特別攻撃隊の絵を描いてみないか」とのお誘いを受けた時、少し悩みましたが、お受けしたのです。私は普段、色鉛筆を使い、猫、鳥などの動物画やグラス、香水瓶などの静物画を描くことを趣味にしており、実は戦争絵画とは縁がありませんでした。

「題材は自由です」ということでしたが、真っ先に脳裏に浮かんだのが、米軍側から撮られた一枚の写真でした。それは白黒の写真で、空と海の間で零戦らしき航空機が、米軍からの激烈な砲撃を掻い潜り、米艦に突っ込む一瞬を切り取ったものです。

30年以上前、この写真を初めて見た時、パイロットはどんな心境だったのだろうかと思いました。特攻に散華された殆どが、十代から二十代の夢多き若者だったと聞いています。基地を離陸してここに至るまでには、今までの短い人生を想い起こし、

未来に想いを馳せ、胸を焦がしたことでしよう。そして、ある時点でそれら全ての想いを振り払い、敵艦に機もろとも命中することだけに集中し、必死に操縦桿を握っているのだらうと、胸が締め付けられる想いでした。

ここまで万難を排してたどり着き、気高き「孤高の戦士」として、見事散華されたのです。

あまりにも寂しいこの写真に、光と色を載せてみようと思いました。そして写真には写っていないパイロットの勇姿も是非描きこみたいと思ったのでした。

若くして散華された英霊の皆様、究極の自己犠牲を払われた英霊の皆様に、心からの感謝と尊崇の念を込めて、丁寧に描いたつもりです。

日本の今があるのは、貴方がたのおかげです、と私は信じています。改めて心からの感謝を申し上げますとともに、安らかに眠り頂きたいと思えます。ありがとうございます。

岩戸博明

作者略歴

昭和52年、海上自衛隊入隊（一般幹部候補生第28期）。特技は固定翼操縦士。第71空司令、第203教育航空隊司令を歴任し、平成21年退官





特攻隊員へのインタビュー

会 員 中 川 法 宏

沖繩海上特攻4・7 大和  
西田耕吾一等兵曹  
教員から海軍へ

大正11年2月26日生まれです。中学校2年まで和歌山市内の海草中学（現在の県立向陽中学校・高等学校）に通ってました。昭和10年に父親が結核で亡くなったので母親の実家のある紀ノ川に引越して3年から粉河中学にいきました。中学校を卒業して師範学校で2年勉強して卒業後は国民小学校で教員をしていました。4年生と5年生です。4年生までは男女一緒の教室で教えますが、5年生からは男女別になります。そんな時代やな。昭和18年に徴兵で海軍に入りました。生徒たちに見送られて行ったわけです。海軍では大竹海兵団で基礎教育を受けました。西は山口から東は岐阜までの新兵は大竹で訓練を受けるんです。海兵団での基礎訓練を修了して18年7月に大和への乗艦を命じられました。呉にあった大和、扶桑、伊勢、日向、この4隻が近畿圏の者が乗る戦艦です。「鬼の日向か蛇の伊勢か、味は大和の吊るし柿」なんて教育する者の厳しさを言っていました。師範

学校で進級が速いから初めのうちに絞つとこうということやな。

はじめに配置されたのは運用科で甲板の上の雑用です。艦首に菊の御門があるでしょう。腰にロープ締めて下ろされてました。腰にロープ締めて下ろされてな。最初は戦闘ではなくてトラック島へ行って飛行場建設の作業員です。トロッコ押しに行つたわ。向こうは夏、内地に帰つたら冬だったから寒かつたあ。それから配置換えがあつて5分隊にな



大和配属の頃、呉の写真館に

りました。5分隊は高角砲です。右舷高角砲発令所は右舷の底部分です。垂直のはしごを2つ降りていくんです。窓もない部屋に10人ぐらいおりました。発令所は装甲の厚い所やで爆弾食らつてもびくともせんところやで安心じゃ。わしのここの仕事は船が走つとると上下、左右に揺れるでしょ。それを顕微鏡みたいな覗いて十字に合わせるのが仕事や。（標準を合わせる）海軍は海軍の学校を出てないといかん。砲術学校とか通信学校とか出ないと馬鹿にされるんです。ケツペタも結構食らいましたわ。

レイテ沖海戦の時は武蔵は前の方やられて前のめりに沈みかけてた。沈んだときの様子は戦後本で読みました。

レイテ沖海戦から帰って大和も被害受けてますやろ。修理の間、休暇が出たので実家に帰りました。そのとき「今度、大和が出たらもう終わりじゃ」と母親にだけ伝えました。

沖繩海上特攻4・7 大和

前々から沖繩に行くぞって噂は立ってたな。いよいよ出撃という時にみんな主砲前の甲板に集められて有賀艦長から「このような理由で沖繩に突っこむ」副長から「故郷の方に向けて父母と別れよ」と言われた。父親はすでに亡くなつてた

から徳山から故郷の方に向いてお袋に「沖繩に行くからもう帰れへん。さよならや」そう別れを告げました。

7日の昼は戦闘配食でおにぎり二つや。食べ終わってしばらくしたら艦内拡声器で「敵編隊、おおよそ200機！」って放送が入った。それから撃ち合いやけど主砲は撃ってへんのとちゃうかな。天気悪かったしな。爆弾や魚雷が当たった衝撃も来るわな。いよいよという時に甲板に上がるんやけど電気系統もやられて真っ暗じゃ。それでも毎日梯子の上り下りしとったから感覚でわかるんやな。甲板上がったけど大和も左舷に傾いて赤腹見えとるし海に飛び込みにやしうがない。わしより前に飛び込んだ男がおるんやけど、上がってこんのや。もうアカンと思っただけ前の一番副砲の辺りから飛び込んだけど渦にもまれてしもうて沈んでいった。そうしたら大和が大爆発起こして私の体が海面まで持ってこられた。あと一秒でも遅かったら、もう少しでも海水飲んでいたら終わっとったな。飛び込んで上がって来んのおるわ。海面まで浮かんだら丸太やら角材やら浮いとるんや。あらかじめ船の修理に使うから積んであるんや。大和の甲板も木やでバラバラになったのが浮いとる。それに捕まって浮

いとった。浮いとつてもアメリカの飛行機が降下してきて撃ってきましたよ。角材に捕まっておつても怖いから頭隠すんじや。

助けられた駆逐艦は冬月です。冬月がランチ出してくれて引っ張り上げてくれたんじや。大和の前の森下艦長が第二艦隊の参謀長やったんや。この人がわしの10メートルぐらい近くを浮いとったんじやな。「参謀長はおられますか！」ってランチ出して探しに来てたんじやな。この機会を逃すまいと思つて平泳ぎで近づいて行つたら引き揚げてくれた。けられても重油で真っ黒じゃから兵隊の古着をもらつて着替えた。後で見ついたら大和の沈没したところとわりに近距離で漂流しとったんじやな。

### 船なき海軍

佐世保に帰つてから約一カ月、治療院みたいなところやな。汚い所で隔離じや。そこで毎身体操とか小運動会みたいなことしとった。シャバに大和が沈んだことを知られたらいかんからな。それが終わつたら呉の海兵団に行くことになつて呉の街で建物疎開で家倒すんじや。えらい仕事やで。朝、弁当持つて出て夜まで建物疎開。呉の海兵団の人たちとしとったんじや。

終戦迎えたときは山口県です。小学校で寝泊まりしてた時にきいた。この時わしは下士官になつとったから何人かの兵隊連れて小学校におつたんじやけど何日かしたら「もう戦争終わつた」ってきいた。もう兵隊もおらんくなつてた。その時の心境は「よう助かつたもんやな」ここに残つた兵隊をまとめて約一時間歩いて駅まで出て大阪行きの列車に乗つて呉線周りで大阪まで出ました。この段階で和歌山の者はわしともう一人呉の海兵団で一緒だった大谷君だけじや。8月24日に家に帰ってきました。

戦後は和歌山に帰つて38年、教員として勤めました。生徒たちに戦争の話、大和の最後の話をしました。大和が沈んで76年たつたら大和時代の仲間との交流はもうないわな。師範徴兵で馬鹿にされとつたけど大和はまあまあな船やつたな。配属が決まった時はうれしかった。憧れの船やつたからな。

インタビュー日時 令和3年4月30日  
参考文献

NHKアーカイブス

「巨大戦艦大和」2012年12月8日  
歴史街道 平成25年10月号



# 筑波海軍航空隊記念館「若人の夢と祈り」展

評議員 原 知崇

大東亜戦争末期の昭和二十年六月二十三日、硫黄島よりB 29の護衛として敵機P 51が大挙茨城県方面に襲来しました。

これを迎撃した搭乗員のひとり、戦闘三〇八飛行隊の新本克己飛行兵曹長（甲飛八期）は東茨城郡に墜落。その地には簡素な木碑が建てられその戦死の地の印とされました。これについて昭和五十一年に当会会員でもある豊岡昭さん（甲飛十六期）が調査を行うも難航し、さらには流れて平成二十年。住谷定さん（甲飛十五期）が土地の古老から情報を聞き、その朽ちた木碑を確認、あらためて新本飛曹長戦死の地が発見されました。この土地を知る土地の人たちのお話では、搭乗員の骨の一部なども木碑の基部に埋めたとのことでした。

木碑の近傍には零戦が落ちたと思しき穴に泥水が溜まり、「零戦池」と名付けられ時折油のようなものがぼつりぼつりと浮かんでいました。

住谷さんの呼びかけによってこの地に新本飛曹長を顕彰する石碑が建立され、予科練関係者、地元民、また甲飛喇叭隊

など多数の参列のもと、盛大に第一回慰霊祭が開催されました。

さらに平成二十二年には同地から零戦の尾輪も出土、これは後に靖國神社に奉納されました。

その後、毎年土地の方と予科練関係者、甲飛喇叭隊によって慰霊祭が営まれておりましたが、令和元年にもなると地権者も何度か変わり、この碑の地所が太陽光発電設備の施設として開発、コンクリートが敷き詰められることになりました。これを知った甲飛喇叭隊の呼びかけによって、筑波海軍航空隊記念館、報国515資料館など、関係者やボランティアによって同地において数度の発掘調査が行われました。

結果、機体の部品片の他、飛行帽に包まれた人骨らしきものが出土しました。その後、警察でDNA鑑定等の調査が行われ、令和四年になり、この収容された骨は新本飛行兵曹長のものと確認され、出征より実に七十七年ぶりにご実家へ帰還、飛曹長の父、母、兄の眠る御墓に納骨されたのでした。

零戦池こそ無くなりましたが、慰霊碑は少し場所を変えられて維持され、現在では再び慰霊祭が続けられています。

この新本飛行兵曹長をはじめ、若き搭

乗員像を軸に、空戦の状況と、現在も続くその戦後の地域慰霊の状況について詳しく紹介した展示が茨城県笠間市の筑波海軍航空隊記念館で開催されています。会期は三月二十六日（日）まで。

<https://p-ibaraki.com/>

企画展 若人の夢と祈りと祈り

2022年 12月3日(土)

2023年 3月26日(日)

筑波海軍航空隊記念館

9:00~17:00(最終入場16:00) TEL:0296-73-5777

連載山ある記21 栃木県「三本槍岳」

会員 池田 康博

栃木県と福島県の境に「三本槍岳」という、印象的な名前の山がある。数年前に登ろうとした時には、「峰の茶屋跡避難小屋」がある茶臼岳と朝日岳の鞍部に、強風が吹き抜けていたため断念した。そして、令和3年10月19日、再び那須ロープウェイ麓駅上の「峠の茶屋駐車場」にやってきました。

朝8時5分に駐車場を出発、8時45分には峰の茶屋跡避難小屋を通過。この日は心配した強風はなかったが、剣が峰の東側（那須高原側）を巻くように進む頃



清水平のナナカマドの実

には霧が濃くなり、朝日岳は徐々に見えなくなっていました。朝日岳は福島県側が崖になっていて、そこを通る登山道には、横に、或いは縦に長い鎖や

手すりが設置されている。その狭く急な登山道を両手も使いながら慎重に登って行き、9時16分に朝日岳分岐に出た。ここはもう稜線上で、右に行けば5分程で朝日岳山頂である。しかし、この時には霧のため、山は全く見えなくなっていた。分岐には残雪があった。気温も下がってきたので、ここでウインドブレーカーを着て、左に向きをとり進む。目前の小ピークを越え、また登り返してしばらく行くと「熊見曾根」の分岐が現れた。この分岐を左にとると「三斗小屋温泉」であるが、ここは直進して緩やかに登り、「一九〇〇m峰」を越えて再び下って行くと、ハイマツや熊笹の茂った平らな地形の清水平に出た。

ここには木道が整備されていて、好天であれば高原の景色が広がる中、快適な山歩きができる筈であったが、熊笹の中に時折見えるナナカマドの赤い実に、季節の早い流れを感じながら黙々と歩いた。10時4分に北温泉分岐に到着、道標には三本槍岳まで九百mとある。「あと一息」ということで小休止の後出発。

木道が途絶えると、登山道は泥道になり水溜まりも方々にあつて、登山靴は勿論、ズボンまでドロドロになりながら進み、最後の急坂を登って山頂に到着した。10時31分であった。



三本槍岳山頂

標高千九百十七m、那須連峰の最高峰である山頂は平らで丸く広い。福島県西郷村が設置した標識もあつて、いかにも県境の山らしい。三百六十度の展望のはずだが濃い霧の中に何も見えず、記念写真を撮った後、10時40分に下山開始、来た道に戻って11時36分に朝日岳分岐を通過、峰の茶屋避難小屋に着いたのは12時20分であった。

ところが、小屋に入った時から、急に寒さで体が震え出した。歩いている時は感じなかったが、体は意外に濡れて、冷えていたのだろう。急いで湯を沸かしてカップ麺を食べ、熱いコーヒも飲んで、体を中から温めて凌いだ。

今日は濃霧で引き返すグループもあつたが、兎にも角にも、山頂まで行きつめたことで良しとした。ここでゆっくり休んで、駐車場に帰り着いたのは13時36分であった。

顕彰譜 ( 9 ) 会報 1 3 4 号から始めた特別攻撃隊全史第二版の顕彰譜の  
ご紹介第九回目です。

# 知覧特攻平和観音

陸軍航空



第 50 回慰霊祭 (平成16年) を記念して全面的に改築された特攻平和観音堂

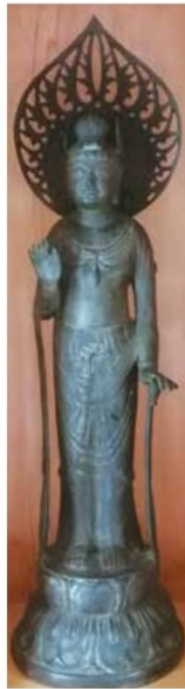
### 由来 (碑文の抜粋)

この地は昭和十七年三月大刀洗陸軍飛行学校知覧分校の設けられたところであるが、昭和二十年本土最南端航空基地として、陸軍最後の特攻基地となり、凡そ一千の若き勇士が帰らざる征途につかれた土地である。これら若人の至誠至純の精神を顕彰し御霊のとこしえに安らかならんことを祈念し、以て祖国の久遠の平和復興に資せんため、関係旧将士の浄財を集めてつくられた特攻平和観音像を、今この祈願を同じくする有志等の願望によりこのゆかりの深い知覧町旧飛行場跡に奉安する。

この観音像は大和法隆寺の秘佛 (夢ちがい観音) を模造したものであり、高さ一尺八寸、体内に特攻勇士の芳名を謹書した巻物が納入されている。

茲に知覧町民の浄財をもって堂宇を建立し一千勇士の御霊を永遠に鎮めまつり、その精神を顕揚して祖国平和復興を祈念する。

昭和三十年九月二十八日





陸軍航空

## 知覧特攻平和会館



### 特攻平和会館（落成式町長挨拶文抜粋）

知覧町は戦後いち早く町民や関係者の浄財によって特攻勇士のとしえに安らかならんことを念じ、観音堂や特攻銅像を建立し慰霊顕彰を努めてきました。また、昭和50年3月には公園休憩所を利用して遺品館を開設しましたところ、全国各地から訪れる人も多くなり、大きな反響が寄せられました。その施設は手狭でしたので、町は60年度から二ヶ年の継続事業として工事費五億円をかけ特攻平和会館を建設しました。

全国各地の遺族や関係者から寄せられた遺品や資料の散逸を防止する一方さらに収集、保存、展示に努め、これらの史実を正しく伝え、世界恒久の平和に寄与しようとするものであります。

昭和六十二年二月

祭礼 毎年5月3日

所在地 〒八九七〇〇三〇二

鹿児島県南九州市知覧町郡一七八八  
一  
(〇九九三一八三一五二三五)

交通案内 鹿児島市より34軒バスの便あり

陸軍航空

# 都城特攻振武隊 はやて慰霊碑



## 慰霊碑建立の由来（碑文）

昭和二十年四月 日本 の 命運 を かけた 沖縄 攻防 戦 は 凄 惨 熾 烈 を き わ め た 南 九 州 の 陸 海 軍 航 空 基 地 か ら は 爆 弾 と 片 道 燃 料 だ け を 積 み 込 ん だ 特 別 攻 撃 機 が 日 夜 続 々 と 出 撃 し て いた

当時 市 の 郊 外 に も 東 ・ 西 両 飛 行 場 が あり 同 年 四 月 こ の 基 地 か ら 初 め て 四 式 戦 「 疾 風 」 特 別 攻 撃 機 が 沖 縄 周 辺 の 目 標 め ざ し て 南 の 空 へ 飛 び 立 っ て 行 っ た 以 来 七 月 一 日 まで 十 七 次 に 及 ぶ 出 撃 が 行 は れ 未 だ 少 年 の 面 差 し を 残 す 二 十 才 前 後 の 若 い 特 別 攻 撃 隊 員 は 戦 局 の 好 転 と 祖 国 の 勝 利 を 信 じ て 南 海 の 果 て に 散 華 し た の で あ る

戦 後 三 十 二 年 の 歳 月 と 変 容 に よ っ て 思 出 の 基 地 一 帯 は 当 時 の 面 影 を し の ぶ よ す が も な い 時 あ た か も 三 十 三 回 忌 を 迎 え る に 至 っ て 隊 員 の 遺 族 や 各 方 面 に 慰 霊 碑 建 立 の 気 運 が 高 ま り 本 年 六 月 市 長 を 会 長 と す る 奉 賛 会 が 結 成 さ れ た 幸 に ひ ろ く 内 外 か ら 多 額 の 寄 付 が 寄 せ ら れ こ こ に 永 久 平 和 の 願 を こ め て 特 別 攻 撃 隊 員 並 び に 基 地 に ま つ わ る 殉 国 の 士 の 英 霊 を 合 祀 す る も の で あ る

昭和五十二年十一月十五日

都城市特別攻撃隊戦没者奉賛会



東飛行場跡



西飛行場跡

所在地 宮崎県都城市都島町旧陸軍墓地  
建立 昭和52年11月15日  
建立者 都城市特別攻撃隊戦没者奉賛会

管理 都城市役所内  
慰霊祭 都城市特別攻撃隊戦没者奉賛会  
毎年4月6日奉賛会主催で実施

陸軍航空

# 明野忠魂碑 (戦闘隊慰霊碑)



戦後荒れ果てていたが昭和30年明野陸軍飛行学校跡に陸上自衛隊航空学校が入り、碑の周辺も整備され現在ようになった

所在地 三重県伊勢市小俣町明野

五五九三一

陸上自衛隊航空学校内

建立 昭和17年12月18日

例祭 毎年10月第3土曜日

主催者 明野忠魂碑顕彰会

写真提供 陸上自衛隊航空学校



陸軍航空

# 水戸つばさの塔



## 水戸つばさの塔と特攻隊

常陸教導飛行師団で編成された特攻隊は、比島方面二隊、沖縄方面一〇隊の合計一二隊であり、突入者は九五名で、それ以外に特攻隊に指定されていて戦死や殉職した者が一八名いる。また別に本土防空作戦で体当りして戦死した者が六名いる。この塔は右特攻隊死者をはじめ水戸飛行場に関係ある戦死、殉職者七〇九柱を祀ったものである。

## 由来記

昭和十三年、ここ前渡の地に千二百ヘクタールに及ぶ水戸飛行場を設定し、水戸陸軍飛行学校が開校、通信、戦術、戦技、武装、高射、化学戦、自動車、特操、佐尉官、少年飛行兵等の教育と研究を実施し、東部に陸軍航空審査部水戸試験場が設置された。昭和十五年、水戸南飛行場に陸軍航空通信学校が開校され、通信教育と研究を移管した。

戦局の要請により昭和十八年八月、明野陸軍飛行学校分校が開校、水戸校は仙台に移駐した。

昭和十九年六月に至るや、分校は常陸教導飛行師団に改編、精鋭空中戦士の養成と研究に加え、本土防空の作戦任務を附与された。

この地にあつてその職に殉ずる者および、昭和二十年二月十六、十七日の艦載機群遊撃等により生命を捧げた者その数百八十柱、また南飛行場に於ても電鍵を片手に華と散った者数知れず、更に昭和十九年十一月以降、特別攻撃隊一宇隊、殉義隊、第二十四振武隊、第五十三振武隊、平井隊、誠三十五飛行隊、第六十八振武隊の勇士七十余人は相ついで進発、レイテ沖に、台湾、沖縄海域に敵艦船を求めて突入し国離に殉じた。

昭和二十年四月、師団主力は群馬県新田飛行場に移動し終戦に至った。

ここに終戦三十周年を期し、関係者ならびに有志相計り、この戦跡を後世に伝え、殉国英霊の偉業を顕彰し、祖国永遠の平和を祈念してこの塔を建立する。

昭和五十五年五月三日

水戸飛行場記念会

所在地 〒三二一ー一〇一

茨城県ひたちなか市新光町

五五二ー四〇

建立 昭和50年5月3日

追悼式 ひたちなか市追悼式

11月第2週(しあわせプラザで実施)

特攻文芸

短歌・俳句・川柳の部



● 母と娘の凝視<sup>み</sup>めてをりし月の暈<sup>かき</sup>

母の瞳<sup>め</sup>が「病気<sup>め</sup>ごめんね」露<sup>つゆ</sup>の声

● 祖国<sup>くに</sup>の秋 母の亡<sup>な</sup>き骸<sup>がい</sup> 上陸<sup>じやうりく</sup>す

亡<sup>な</sup>き骸<sup>がい</sup>に 野菊<sup>のぎく</sup>いっばい 土葬<sup>どさう</sup>かな

松花江

● 青空<sup>あおぞら</sup>の 空<sup>そら</sup>のかなたに 征<sup>せい</sup>く君<sup>きみ</sup>の

手<sup>て</sup>を振<sup>ふ</sup>る姿<sup>すがた</sup> 今<sup>いま</sup>も忘<sup>わす</sup>れじ

● みやしろに 桜<sup>さくら</sup>の花<sup>はな</sup>の 咲<sup>さ</sup>く時に

逢<sup>あ</sup>いに行<sup>い</sup>きたや 君<sup>きみ</sup>待<sup>まち</sup>つか

淳子

● 寒<sup>さ</sup>さより 懐<sup>なつか</sup>しい 電<sup>でん</sup>気<sup>き</sup>代<sup>だい</sup>

● 温<sup>ぬ</sup>暖<sup>ぬ</sup>化<sup>か</sup> 氷<sup>こおり</sup>柱<sup>しら</sup>知<sup>し</sup>らな<sup>い</sup> 子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>た<sup>ち</sup>

ネコ



### 新刊図書紹介

#### 「米軍から見た沖繩特攻作戦」

本書はアメリカ人のロビン・リエリー氏が著し、当顕彰会会員の小田部哲哉氏が翻訳したものです。

表紙に「カミカゼVS米戦闘機、リーダーピケット艦」と記されていますように、特攻機と米戦闘機、リーダーピケット艦の戦闘模様が主となっていますが、「義烈空挺隊」についても記述されています。本文の構成は、序章、第1章から第8章の九章からなっています。

序章から第2章までがリーダーピケット任務の概要、使用された艦艇、特攻機に対する戦闘、使用された米軍戦闘機、特攻に使用された日本軍機や作戦などが記述されています。

第3章から第7章はリーダーピケット艦を中心とした戦闘記録で、戦闘行動が詳細に記述されています。

第8章にはリーダーピケット艦が大きな損失を被った原因について書かれています。

特攻機の行動については、初期のフィリピン戦の頃には護衛を兼ねた戦果確認の航空機がついていて判定するようになっていました。戦果確認機が未帰還になる事が多く不明になる事が多かった

ようです。その上、沖繩戦の頃には、戦果確認機を付ける余裕が無くなり、特攻機だけの出撃が多くなり、更に行動が不明になりました。

その点で、全てではありませんが、本書は特攻機の行動について知る事が出来る貴重な資料だと思います。

特攻隊は無駄だったとの主張が多くあります。

確かに戦没した特攻隊員の数と米軍の損失を比べるとそのような考えもあると思います。

しかし、本書を読むと、米軍に大きな脅威を与えていた事が理解できます。裏面の帯紙には次のように書かれています。

「カミカゼ攻撃は、気の狂った者が命令した狂信的な任務ではなかった。アメリカ人に日本侵攻が高つくことを示して、

侵攻を思い止まらせる唯一理性的で可能な方法だった。この考えで、日本人は多くの航空機とパイロット

**米軍から見た  
沖繩特攻作戦**  
カミカゼvs.米戦闘機・リーダーピケット艦  
ロビンリエリー著  
小田部哲哉訳

出撃後、日本軍機は米艦艇・戦闘機とどう戦ったか?  
**特攻機の最期を  
米戦闘記録で再現!**  
初めて明かされる日米戦闘機の激烈な戦い

トを片道攻撃に投入した。

これから述べることは、ほぼ間違いなく第2次世界大戦で最も困難な海上任務の一つに携わった人々と、艦艇と海軍・海兵隊・陸軍の航空機、そして戦闘がどのように展開したかを再現したものである。― (本文より)

記録として価値が高い書籍と 생각합니다。ご興味のある方はご一読下さい。

本書は、書店で購入出来ませんが、Amazonなどの通販でも購入できます。

出版社・並木書房

定価 2970円 (税込み)



**事務局からの報告等**

一 令和4年度第3回理事会及び第1回臨時評議員会の実施報告

昨令和4年11月16日(水)に、第3回理事会が、12月9日(金)に、第1回臨時評議員会が、それぞれ開催され、令和5年度事業計画及び収支予算(令和5年度収支予算書・案)が審議され、いずれも令和5年度計画として承認されました。なお、令和5年度事業計画の骨子は次のとおりです。

(1) 特攻顕彰会主催等慰霊祭  
ア 第44回特攻隊全戦没者慰霊祭  
靖國神社

令和5年3月25日(土)

イ 第73回特攻平和観音年次法要

世田谷山観音寺

令和5年9月23日(土・祝)

(2) 各護國神社への「あゝ特攻勇士の像」奉納

(3) 全国各地慰霊祭への参加、協賛

(4) 機関誌「特攻」の発行(年5回)

(5) 特攻隊戦史他の調査研究と資料の収集

収支予算(令和5年度収支予算書)は次頁のとおり。

また、令和5年度の当頭彰会の理事及

び評議員は、次のとおりです。  
理事等

会長

藤田 幸生

理事長

岩崎 茂

副理事長

岡部 俊哉

専務理事

兼事務局長

石井 光政

業務執行理事

鮎田 英一

業務執行理事

福江 広明

理事

白田 智子

理事

久納 雄二

理事

大穂 園井

監事

阿部 軍喜

監事

羽瀧 徹也

評議員

秋山 政隆

宮本 雅史

及川 昌彦

太田 兼照

倉形 桃代

長瀬 彰孝

新垣 敬輝

早川 雅彦

原島 淳子

岩成 真一

原 知崇

永井 昌弘

高松 真希

國分 雅宏

二 第44回特攻隊全戦没者慰霊祭の齋行について

第44回慰霊祭は、新型コロナウイルスの感染状況に鑑み、慰霊祭後の懇親会を除いて、

令和5年3月25日(土) 11時から靖國神

社の於いて齋行予定ですので、皆様ご参集願います。

なお、今後、新型コロナウイルスの感染状況の変化に応じて、昇殿参拝の縮小等の処置をとる場合があります。

その時は、電話やメール等でお知らせしますので、必ず連絡先をご記入下さい。

なお、規模縮小時には、事前に送っていただいた玉串料はそのまま靖國神社に奉納させていただきますが、ご希望の方は返納いたしますので、その旨振り込み時に、備考欄にでもお書きいただけると幸いです。

三 会報記事の訂正について

会報一四三号(令和5年1月号)

11頁4行目

誤 ⑱福岡県特攻勇士の像慰霊祭

正 ⑲福岡県特攻勇士慰霊顕彰祭

寄付者御芳名(敬称略)

(令和4年10月1日〜12月31日)

(単位千円)

六二 熊本陸軍幼学校第48期第6訓育班

二〇 石田 賢一 三 藤本 英憲

三 豊岡 久 三 田崎 鉄男

三 岡田 敏治 三 横山 モナ

二 殿谷 章

令和5年度収支予算書(損益ベース)  
令和5年1月1日から令和5年12月31日まで

(単位:円)

科 目	当年度	前年度	増 減	備 考
I 一般正味財産増減の部				
1 経常増減の部				
(1) 経常収益				
① 基本財産運用益	14,970,000	12,303,000	2,667,000	
② 特定資産運用益	130,000	130,000	0	
③ 年会費	2,740,000	2,853,000	△ 113,000	
④ 慰霊事業益	1,800,000	1,800,000	0	
⑤ 出版事業益	20,000	34,000	△ 14,000	
⑥ 広報事業益	0	0	0	
⑦ 受取寄付金	2,000,000	2,136,000	△ 136,000	
⑧ 雑収入	0	0	0	
経常収益計	21,660,000	19,256,000	2,404,000	
(2) 経常費用	0			
① 事業費	18,284,000	15,876,305	2,407,695	
慰霊事業負担金	820,000	780,000	40,000	
像制作負担金	2,060,000	935,000	1,125,000	
発送等委託費	1,500,000	1,500,000	0	
他団体助成金	2,100,000	2,100,000	0	
役員報酬	180,000	180,000	0	
給料手当	3,480,000	3,360,000	120,000	
福利厚生費	360,000	504,000	△ 144,000	
旅費交通費	2,700,000	2,004,000	696,000	
通信運搬費	522,000	330,000	192,000	
減価償却費	120,000	30,505	89,495	
退職手当	0	0	0	
消耗品費	480,000	450,000	30,000	
印刷製本費	540,000	564,000	△ 24,000	
会議費	120,000	118,200	1,800	
光熱水料費	72,000	82,200	△ 10,200	
賃借料	2,220,000	1,860,000	360,000	
諸謝金	200,000	200,000	0	
臨時雇賃金	660,000	732,000	△ 72,000	
退職手当引当資産繰入	150,000	146,400	3,600	
② 管理費	7,736,000	6,907,537	828,463	
役員報酬	120,000	120,000	0	
給料手当	2,320,000	2,240,000	80,000	
福利厚生費	240,000	336,000	△ 96,000	
旅費交通費	1,800,000	1,336,000	464,000	
通信運搬費	348,000	220,000	128,000	
減価償却費	80,000	20,337	59,663	
退職手当	0	0	0	
消耗品費	320,000	300,000	20,000	
印刷製本費	360,000	376,000	△ 16,000	
会議費	80,000	78,800	1,200	
光熱水料費	48,000	54,800	△ 6,800	
賃借料	1,480,000	1,240,000	240,000	
臨時雇賃金	440,000	488,000	△ 48,000	
退職手当引当資産繰入	100,000	97,600	2,400	
経常費用計	26,020,000	22,783,842	3,236,158	
当期経常増減額	△ 4,360,000	△ 3,527,842	△ 832,158	
2 経常外増減の部	0	0	0	
(1) 経常外収益	0	0	0	
貯蔵品資産受入	0	0	0	
資産計上	0	0	0	
投資活動収益計	0	0	0	
(2) 経常外費用	0	0	0	
特定資産への振替	0	0	0	
貯蔵品除却損	0	0	0	
経常外費用計	0	0	0	
当期経常外増減額	0	0	0	
当期一般正味財産増減額	△ 4,360,000	△ 3,527,842	△ 832,158	
一般正味財産期首残高	291,802,960	288,273,507	3,529,453	
一般正味財産期末残高	287,442,960	291,802,960	△ 4,360,000	
II 指定正味財産増減の部	0	0	0	
一般正味財産から振替	0	0	0	
当期指定正味財産増減額	0	0	0	
指定正味財産期首残高	0	0	0	
指定正味財産期末残高	0	0	0	
III 正味財産期末残高	287,442,960	291,802,960	△ 4,360,000	

新入会員名簿(敬称略)

(令和4年10月1日～12月31日)

青森	濱田 公一
茨城	古川 五十雄
群馬	貝塚 茂樹
東京	山縣 龍也
東京	渡 正人
三重	佐藤 泰夫
三重	三森 道子
兵庫	井階 正浩
兵庫	田中 敬子
大分	岩本 哲男
宮城	洞口 智春 (4・6・25)
福島	福原 利夫 (4・3・14)
埼玉	茂木 昌二 (4・11)
千葉	後藤 英夫 (2・11・1)
東京	有川 信男 (4・5・8)
東京	長谷川 知幸 (4・9・4)
神奈川	松永 太 (4・9・8)
神奈川	湯野 隆子 (4・10・27)
大阪	山口 宗敏 (4・5・13)
大阪	原田 洋 (4・7)
大阪	竹内 英夫 (4・11・13)

会員計報(敬称略)  
ご冥福をお祈りします。

会員ご入会のご案内

「特攻隊戦没者に感謝と敬意を」

当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し「あなた達のこととは忘れません。有難うございます。感謝します。私たちも努力します。どうぞ安らかに！」を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です。これにご賛同して頂ける方ならどなたでも会員にお迎えいたします。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

○当顕彰会の主な事業

- ・特攻隊戦没者の慰霊顕彰(他団体への参加を含む)
- ・会報の発行等による特攻及び戦没者の伝承等
- ・特攻に関する資料の収集、調査、図書等の貸出講演会等の開催その他

○年会費

- ・一般会員 3000円
- ・学生会員 1000円

○ URL: <https://tokkotai.or.jp>

QRコード



ご投稿についてのご案内

ご投稿に際しては、次の点にご留意くださるようお願い致します。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。可能ならば、ワードファイル、又はテキストファイルで頂ければ幸いです。PDFファイルは編集の都合上、お受けできません。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会にお任せ願います。
- 3 投稿記事に関する写真がありましたら、なるべく添付して下さい。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返し致しません。必要な場合はその旨お書き添え下さい。
- 5 会員以外の方の投稿も歓迎致します。
- 6 投稿記事等の送付先は、左記宛てとして下さい。

〒102-0072

東京都千代田区飯田橋一丁目5-7

東専堂ビル2階

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

電話 03-5213-4594

FAX 03-5213-4596

E-mail [jimukyoku@tokkotai.or.jp](mailto:jimukyoku@tokkotai.or.jp)